

Arcserve Replication 統合ガイド

Arcserve® Backup

19.0

arcserve®

法律上の注意

組み込みのヘルプシステムおよび電子的に配布される資料も含めたこのドキュメント(以下「本書」)はお客様への情報提供のみを目的としたもので、Arcserveにより随時、変更または撤回されることがあります。

Arcserveの事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複製、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。本書はArcserveが知的財産権を有する機密情報であり、ユーザは(i)本書に関連するArcserveソフトウェアの使用について、Arcserveとユーザとの間で別途締結される契約により許可された以外の目的、または(ii)ユーザとArcserveとの間で別途締結された守秘義務により許可された以外の目的で本書を開示したり、本書を使用することはできません。

上記にかかわらず、本書で取り上げているソフトウェア製品(複数の場合あり)のライセンスを受けたユーザは、そのソフトウェアに関して社内で使用する場合に限り本書の合理的な範囲内の部数のコピーを作成できます。ただしArcserveのすべての著作権表示およびその説明を各コピーに添付することを条件とします。

本書を印刷するかまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザはArcserveに本書の全部または一部を複製したコピーをArcserveに返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、Arcserveは本書を現状有姿のまま提供し、商品性、お客様の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本システムの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の損失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、Arcserveはお客様または第三者に対し責任を負いません。Arcserveがかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本書に記載されたソフトウェア製品は、該当するライセンス契約書に従い使用されるものであり、当該ライセンス契約書はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者はArcserveです。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212, 52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、及び、DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

© 2022 Arcserve(その関連会社および子会社を含む)。All rights reserved. サードパーティの商標または著作権は各所有者の財産です。

Arcserve 製品リファレンス

このマニュアルが参照している Arcserve 製品は以下のとおりです。

- Arcserve® Backup
- Arcserve® Unified Data Protection
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Windows
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Linux
- Arcserve® Replication および High Availability

Arcserve Backup マニュアル

Arcserve Backupドキュメントには、すべてのメジャー リリースおよびサービス パックについての特 定のガイドとリリースノートが含まれています。ドキュメントにアクセスするには、以 下 のリンクをクリックします。

- [Arcserve Backup 19.0 リリース ノート](#)
- [Arcserve Backup 19.0 マニュアル選 択メニュー](#)

Arcserve サポートへの問い合わせ

Arcserve サポート チームは、技術的な問題の解決に役立つ豊富なリソースを提供します。重要な製品情報に簡単にアクセスできます。

[テクニカルサポートへの問い合わせ](#)

Arcserve のサポート：

- Arcserve サポートの専門家が社内で共有しているのと同じ情報ライブラリに直接アクセスできます。このサイトから、弊社のナレッジ ベース(KB) ドキュメントにアクセスできます。ここから、重要な問題やよくあるトラブルについて、製品関連 KB 技術情報を簡単に検索し、検証済みのソリューションを見つけることができます。
- 弊社のライブ チャット リンクを使用して、Arcserve サポート チームとすぐにリアルタイムで会話を始めることができます。ライブ チャットでは、製品にアクセスしたまま、懸念事項や質問に対する回答を即座に得ることができます。
- Arcserve グローバル ユーザ コミュニティに参加して、質疑応答、ヒントの共有、ベスト プラクティスに関する議論、他のユーザとの会話を行うことができます。
- サポート チケットを開くことができます。オンラインでサポート チケットを開くと、質問の対象製品を専門とする担当者から直接、コールバックを受けられます。
- また、使用している Arcserve 製品に適したその他の有用なリソースにアクセスできます。

コンテンツ

第1章: Arcserve Replication と Arcserve Backup の統合	9
概要	10
Arcserve Backup	11
Arcserve Replication	12
Arcserve Backup と Arcserve Replication の統合	13
機能および利点	14
リモート ブランチ オフィスおよびセントラル データ センタ	15
統合に関する用語および定義	16
統合されたバックアップ プロセスの動作	20
シナリオの作成	21
ジョブの作成	22
ジョブの実行	23
統合されたリストア プロセスの動作	25
第2章: Arcserve Replication と Arcserve Backup のインストールおよび設定	27
Arcserve Backup および Arcserve Replication のインストール方法	28
統合の環境設定	29
スタンドアロンの Arcserve バックアップ サーバの設定	30
レプリカ サーバ - Arcserve Replication にインストールされている Arcserve Backup サーバの設定	31
RBO(リモート ブランチ オフィス) の環境設定	32
RBO 環境設定 - 例 1	33
RBO 環境設定 - 例 2	34
RBO 環境設定 - 例 3	35
第3章: 統合されたバックアップ ジョブの実行	37
統合されたバックアップ ジョブ	38
Arcserve Replication シナリオの作成	39
Arcserve Replication シナリオの実行	42
バックアップ ジョブの作成および実行	44
第4章: 統合されたリストア ジョブの実行	49
統合されたリストア ジョブ	50
Arcserve Replication フェールオーバーを使用したリストア	51
Arcserve Replication データ リワインドを使用したリストア	52
Arcserve Backup を使用したリストア	53
Arcserve Replication 固有のグローバルリストア オプションの設定	54

セッション単位でリストア	55
ツリー単位でリストア	60
照会単位でリストア	62
MS Exchange シナリオのマスタマシンへのリストア	64
マスタマシンへの Microsoft SQL Server データベースのリストア	65
第5章: バックアップ ジョブとレプリケーション ジョブのモニタリング	67
統合されたジョブ モニタリング	68
を使用したジョブ ステータスのモニタリング Arcserve Backup	69
ジョブ キュー モニタリング	70
アクティビティ ログのモニタリング	71
を使用したジョブ ステータスのモニタリング Arcserve Replication	72
アラート 通知	75
Arcserve Backup アラート	76
Arcserve Replication アラート	77
レポートの生成	78
Arcserve Backup レポート	79
Arcserve Replication レポート	80
第6章: トラブルシューティング	83
統合されたトラブルシューティング	84
エラー/警告 メッセージ	85
第7章: 用語集	87
アシュアード リカバリ	87
継続的なデータ保護	87
データのリワインド	87
フェールオーバー	87
マスタ サーバ	87
レプリカ サーバ	88
同期	88

第1章: Arcserve Replication と Arcserve Backup の統合

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

概要	10
Arcserve Backup	11
Arcserve Replication	12
Arcserve Backup と Arcserve Replication の統合	13
機能および利点	14
リモート ブランチ オフィスおよびセントラル データ センタ	15
統合に関する用語および定義	16
統合されたバックアップ プロセスの動作	20
統合されたリストア プロセスの動作	25

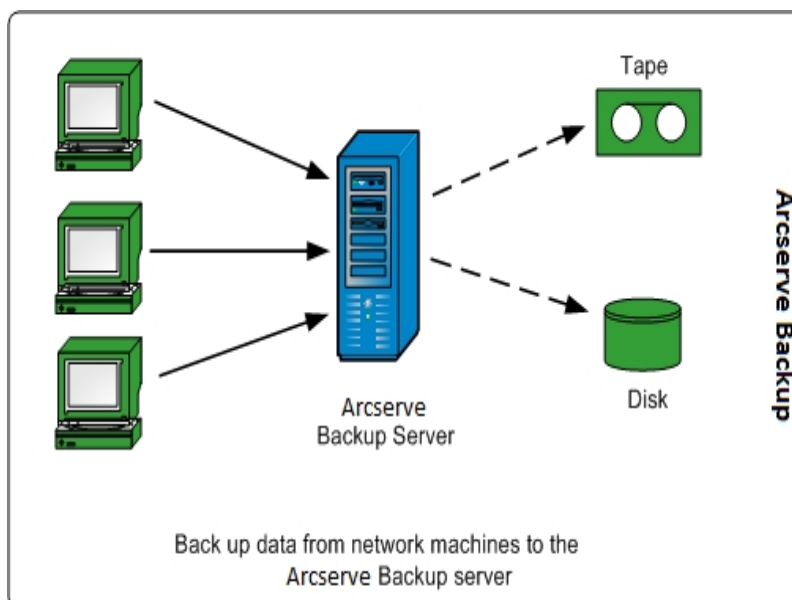
概要

Arcserve Backup には、高性能な D2D(Disk-to-Disk, ディスクからディスク)、D2T (Disk-to-Tape, ディスクからテープ)、D2D2T(Disk-to-Disk-to-Tape, ディスクからディスクからテープ) のバックアップ、バックアップ暗号化、および統合されたアンチウイルス保護、マルチプレキシング、スナップショット バックアップとリカバリ機能を提供します。Arcserve Replication を追加すると、継続的なデータ保護、レプリケーション、および自動アプリケーション フェールオーバーなどにより、さらに機能が強化されます。2 つの製品を統合することで 24 時間 365 日対応の統合化されたリカバリ管理ソリューションとなり、時間とリソースを節約しながら、常に変化する規格(コンプライアンス)、ビジネスの継続性、および惨事復旧などに対処できます。

Arcserve Backup

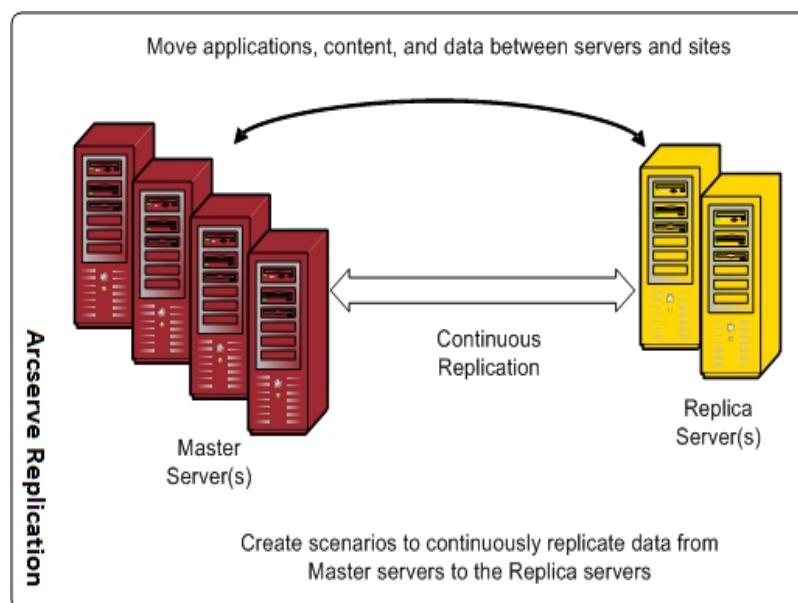
Arcserve Backup は、分散環境およびマルチプラットフォーム環境向けに、完全に柔軟な統合されたストレージおよびリカバリ管理ソリューションを提供します。このアプリケーションでは、オプションのクライアントエージェントを使用して、Windows、UNIX、および Linux が稼働しているマシンを含め、ネットワーク上のすべてのマシンのデータをバックアップおよびリストアすることができます。Arcserve Backup はまた、メディア管理機能およびデバイス管理機能も備えています。

Arcserve Backup は、1 つの管理コンソールから制御を提供し、さまざまなプラットフォームや構成にわたって 1 台または複数のマシンで構成される小規模および大規模の企業環境をサポートすることができます。



Arcserve Replication

Arcserve Replication は、非同期リアルタイムレプリケーションを使用して惨事復旧機能を提供するデータ保護ソリューションです。このホストベースのソフトウェアは、継続的なデータレプリケーションを提供し、アプリケーション データへの変更が発生と同時に、ローカルまたは WAN(Wide Area Network, ワイド エリア ネットワーク)にあるスタンバイレプリカサーバに転送します。継続的なデータレプリケーションにより、常に最新のデータをリストアに使用できます。継続的なデータ保護は、ウイルス、ユーザエラー、またはアプリケーションエラーによるデータ破損からリカバリするためのデータのリwind 技術に基づいています。

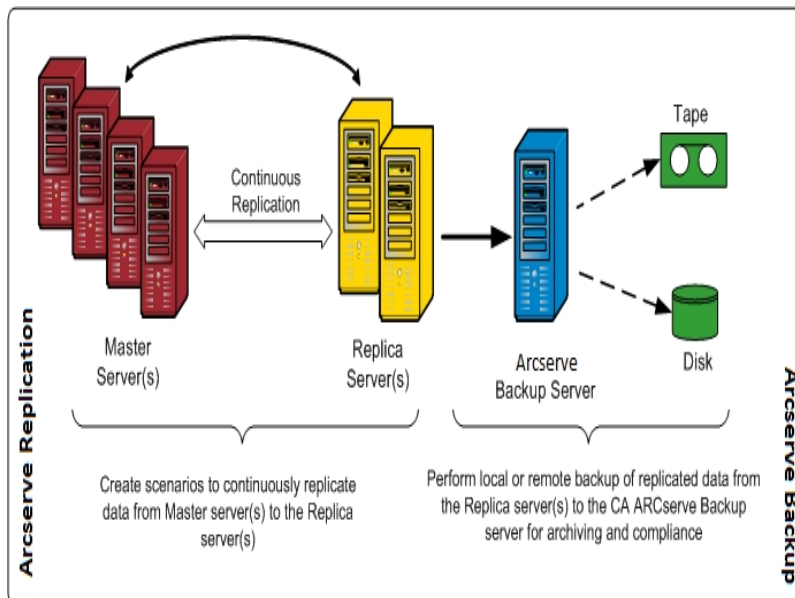


また、アプリケーション モニタリング、完全に自動化されたフェールオーバーおよびフェールバックを追加することで、データ保護機能をさらに強化することもできます。真に継続的なアプリケーションの可用性を実現するための高可用性ソリューションである Arcserve High Availability (HA) を使用することで、これらの機能を利用できます。

Arcserve High Availability は、Arcserve Replication の機能のスーパーセットを提供します。具体的には、Arcserve High Availability によって、実稼働マスタサーバからセカンダリレプリカサーバへのクライアントの自動フェールオーバー機能(スイッチオーバー) が追加されます。そのためにクライアントを再設定する必要はありません。また、実稼働サーバおよびサーバで実行中のアプリケーションのステータスを自動的にモニタリングする機能も追加されます。マスタサーバが元の状態にリストアされたら、IT 管理者は Arcserve High Availability を使用することによって、ボタンを押すだけでマスタサーバを再開できます。データやアプリケーションの可用性を失うことなくレプリカサーバから自動的にフェールバックできるのです。

Arcserve Backup と Arcserve Replication の統合

Arcserve Backup と Arcserve Replication を統合すると、継続的なデータ保護を実現し、その保護されたデータをバックアップできるという二重の利点があります。この統合により、Arcserve Replication は、マスタ サーバ(実稼働サーバ) からレプリカサーバへのリアルタイムで継続的なデータ保護を提供し、Arcserve Backup は、アーカイブやコンプライアンスのために、この複製されたデータをレプリカサーバから Arcserve Backup サーバにバックアップできます。レプリカサーバからバックアップを行うことで、バックアップ時間を確保する必要がなくなり、マスタサーバへの影響が最小限に抑えられます。その結果、マスタサーバはパフォーマンスを低下させずに処理を続行できます。さらに、Arcserve Backup を使用してバックアップデータをマスタサーバまたはレプリカサーバに復元できます。



機能および利点

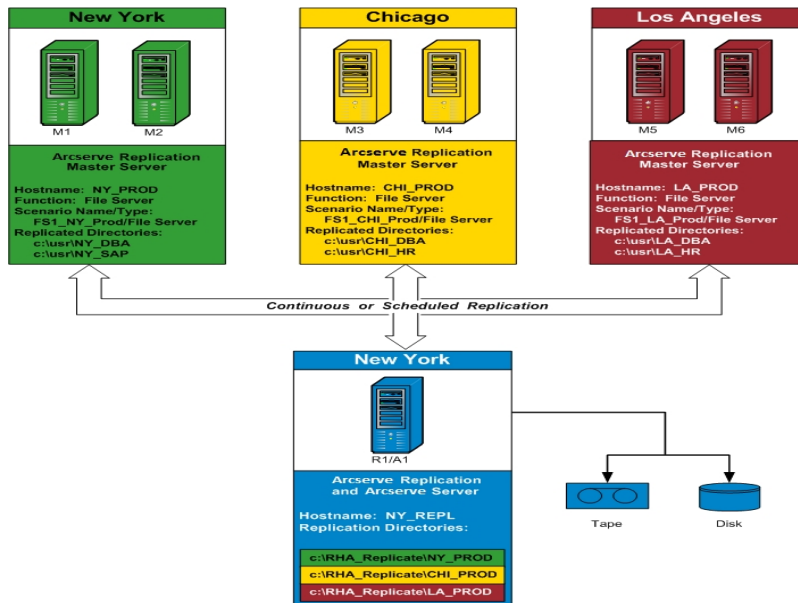
Arcserve Backup と Arcserve Replication を統合すると、レプリケーションと継続的な保護の機能 (Arcserve Replication を使用) 、およびアーカイブとコンプライアンスのためのバックアップ機能 (Arcserve Backup を使用) を使用できます。

この統合で、以下の主な機能と利点が提供されます。

- 使い慣れた Arcserve Backup インターフェースを使用した、バックアップジョブの設定、スケジューリング、および管理。
- 高性能な D2D、D2T、および D2D2T バックアップおよびスナップショット。
- バックアップ暗号化および統合されたアンチウイルスによる保護。
- ビルトイン デバイスとメディアの管理。
- 常に最新のデータをリストアまたはリカバリにできるようにする、変更ファイルおよびデータのリアルタイムで継続的なレプリケーション。
- バックアップをレプリカ サーバから行うことで、マスタ サーバへの影響を最小限に抑え、バックアップ時間の制限を排除。
- 以下のような複数のリカバリオプション。
 - Arcserve Replication によるフェールオーバーを使用したリカバリ。別の場所にあるスタンバイ サーバへのアプリケーションのリカバリ機能、および実稼働サーバがリストアされた後のアプリケーションのスイッチオーバーフェールバック。
 - Arcserve Replication によるデータのリワインドを使用したリカバリ。破損データを任意の時点 (リワインド ポイント) にリワインドするためのリカバリ機能により、CDP (Continuous Data Protection、継続的なデータ保護) を提供。
 - Arcserve Backup によるリカバリ。テープまたは他の従来のバックアップメディアからのリカバリ機能。
- 複数の RBO (Remote Branch Offices、リモート ブランチ オフィス) から、CDC (Central Data Center、セントラル データ センタ) へのリアルタイムのデータ統合、結果として、バックアップの一元化およびデータ統合が実現。セントラル データ センタにあるレプリカを使用して、バックアップを一元的に実行することで、各ロケーションにおける IT サポートの必要性を削減できます。
- アシュアード リカバリ (回復検証) 機能により、惨事復旧 レプリカ サーバの詳細なテストを、無停止かつ完全自動化して実行可能。これにより、マスタ サーバ、レプリケーション プロセス、または惨事に備えて実装されている自動フェールオーバー保護メカニズムに影響を与えずに、レプリカ サーバのアプリケーションをリカバリできるかどうか、テストできます。

リモート ブランチ オフィスおよびセントラル データ センタ

Arcserve Backup と Arcserve Replication を統合することで、CDC (Central Data Center、セントラル データ センタ) で RBO (Remote Branch Office、リモート ブランチ オフィス) サーバのバックアップレプリカを作成できます。CDC にあるバックアップレプリカ サーバは、ブランチ オフィス サーバに対し、優れた惨事復旧機能と継続的なアプリケーション保護機能を提供します。また、複数のブランチ オフィスの一元化および統合されたバックアップを1つの拠点で行うことができます。リモート ブランチ オフィスのバックアップをこのように統合することで、すべてのロケーションにおいて専門のITサポートを行う必要性が削減されます。多くの異なる拠点における複数のサーバ、ストレージ デバイス、およびアプリケーションのインストールおよび維持には、高いコストがかかります。さらに、CDC にバックアップレプリカ サーバを置くことで、テープの移動に関するセキュリティ上のリスクが減り、オフセット テープ メディアおよび取り扱いコストを削減できます。



統合に関する用語および定義

Arcserve Backup と Arcserve Replication 間の統合の詳細を理解する前に、各製品で使用されている用語および定義を理解しておく必要があります。

統合では以下の用語および定義が使用されます。

シナリオ

Arcserve Replication シナリオは、システムの処理を管理するための基本です。Arcserve Replication シナリオには、常に最低 1 台のマスタサーバと 1 台のレプリカサーバが含まれます。また、1 台のサーバで複数の独立したシナリオを実行できます。

シナリオとは、以下を表す仕組みです。

- 保護するアプリケーションおよびデータ
- アプリケーションおよびデータの格納場所 (つまり、マスタサーバおよびソースディレクトリ)
- データがレプリケートされる場所 (レプリカサーバとそれらのターゲットディレクトリ)
- 自動フェールオーバーおよびテストを行うかどうか、およびそれらの実行方法

注： Arcserve Backup は File Server、MS Exchange、および SQL Server のシナリオのみをサポートします。

マスタサーバ

マスタサーバは、ユーザが実際にデータの変更 (読み込みおよび書き込み) を行うアクティブサーバまたは実稼動サーバです。マスタサーバで行われた変更は、リアルタイムに継続的にキャプチャされ、1 台以上の関連付けられたレプリカサーバに転送 (またはレプリケート) されます。そのため、すべてのレプリカサーバには、常にマスタサーバのデータの正確なコピーが維持されます。

レプリカサーバ

レプリカサーバはパッシブサーバです。マスタサーバからレプリケートされた変更を除き、このサーバではデータを変更することができません (読み取り専用)。1 台のマスタサーバに、複数のレプリカサーバを関連付けることができます。レプリケートされたデータをマスタサーバと同期化する場合、サーバ間のデータが比較され、マスタサーバに加えられた変更のみがレプリカサーバに送信されます。その結果、WAN のトラフィックは最小限に抑えられます。

CDP (Continuous Data Protection、継続的なデータ保護)

CDP (継続的なデータ保護) は、データをリカバリするための機能です。これは、たとえば、日次または週次のバックアップまたはスナップショットでキャプチャされたある特定の以前の状態にリカバリするだけでなく、任意の時点の状

態にデータをリカバリできる機能です。これにより、ウイルスが発生した場合はいつでも、原則的にまったくデータを失わずに、ウイルスが発生する直前の状態に高速リカバリできます。

フェールオーバー

フェールオーバーは、マスタサーバ上で保護されているアプリケーションの障害を検出し、基本的にはデータも時間もまったく無駄にせずに指定されたレプリカサーバに(自動的にまたは手動で)切り替える機能です。マスタサーバで障害が発生した場合、またはメンテナンスのためにシャットダウンする必要がある場合、同期化された(ローカルまたはリモートにある)レプリカが瞬時に自動的にマスタサーバに切り替わります。

データのリワインド

データのリワインドは、ファイルを破損前の時点(リワインドポイント)までリワインドするリカバリ方式です。この組み込みリワインド技術は、レプリカサーバで機能するので、以前の状態への「データのリワインド」はすべてレプリカサーバでのみ実行できます。

リワインドポイント

リワインドポイントは、イベントまたは処理をマークするリワインドログ内のチェックポイントです。格納される実際の情報には、リワインドポイントがアクティブになった場合にイベントを取り消す処理が含まれます。データリカバリでは、リワインドログ内のこれらのリワインドポイントまたはブックマークを使用して、現在のデータが以前の状態にリセットされます。

アシュアードリカバリ

アシュアードリカバリ(回復検証)では、実稼働環境やレプリケートしたデータに影響を与えることなく、実際にアプリケーションを実行することで(データの変更も含む)、惨事復旧サーバを正確にテストできます。

アシュアードリカバリを使用すると、アプリケーションサービスを起動するためにレプリケートされたデータスナップショットを透過的かつ無停止でテストし、レプリケーションサーバ上のデータの整合性を検証するのに必要なすべての処理を実行できます。アシュアードリカバリによってこの機能が実行される際は、テスト中に実稼働システムが無防備な状態になったり、実稼働アプリケーションの可用性が阻害されたりすることはなく、テスト完了後にデータを再同期化する必要もありません。

中断モード

中断モードでは、中断されたレプリカサーバへの変更の送信が一時的に中断されます。変更はレプリケーションが再開されるまでスプールに記録され続けるので、再同期化の必要はありません。レプリケーション再開後、蓄積され

た変更が転送されて適用されるので、データの完全な再同期化を実行する必要はありません。

アシュアード リカバリ(回復検証)が設定されたシナリオをバックアップする場合は、アプリケーションの整合性が保たれるので、リストア後にアプリケーションをリカバリする必要はありません。ただし、中断モードを有効にして(アシュアード リカバリを設定せずに)シナリオをバックアップすると、バックアップ時のアプリケーションの状態によっては、リストア後にアプリケーションをリカバリする必要があります。

同期

同期化は、マスタ サーバのデータをレプリカ サーバのデータと同期させるプロセスです。マスタ サーバとレプリカ サーバを正確に同期させるため、2つのファイル構造の比較が行われ、マスタ サーバで欠けている内容(ファイルおよびフォルダ)、またはレプリカ サーバの内容と異なっている内容が判別されます。同期化には以下のレベルがあります。

- ファイルレベルの同期化では、変更発生時にファイル全体がレプリケートされます。この方法は小さなファイルに使用され、データセット全体がコピーされてレプリカ サーバに送信されます(レプリカ サーバにそのデータがまったく存在しない場合)。
- ブロックレベルの同期化では、変更内容が判別され、(必要な帯域幅と時間を最小限にするために)変更のみがレプリカ サーバに送信されます。これはデータベースなどの大きなデータセットのレプリケートに使用します。

レプリケーション

レプリケーションは、マスタ サーバのファイル内のバイトレベルの変更をリアルタイムにキャプチャして、ファイルおよびデータベースのまったく同じコピーを維持するプロセスです。これらのキャプチャされた変更は、非同期にレプリカ サーバに転送されます。レプリケーションでは、別のマシンにソース データが継続的に更新されるので、レプリカ サーバには常にマスタ サーバと同じデータが含まれます。使用中のファイルをリストアすることがないように、アプリケーションを終了しておく(オフラインにしておく)必要があります。

エンティティ

バックアップおよびリストア用の Arcserve Replication シナリオの詳細な精度レベルを定義します。エンティティの詳細レベルは、シナリオの種類によって異なります。

File Server エンティティ

File Server シナリオでは、1つのエンティティは、マスタ サーバ上で同じボリュームに属するすべてのファイルとディレクトリを表します。

たとえば、マスタ サーバでは C ドライブの内容が 1 つのエンティティを構成し、D ドライブの内容が別のエンティティを構成します。

SQL Server エンティティ

SQL Server シナリオでは、1 つのエンティティは SQL データベースを表します。

たとえば、マスタ サーバでは、企業 A の従業員データベースの内容が 1 つのエンティティを構成し、企業 B の従業員データベースの内容が別のエンティティを構成します。

MS Exchange エンティティ

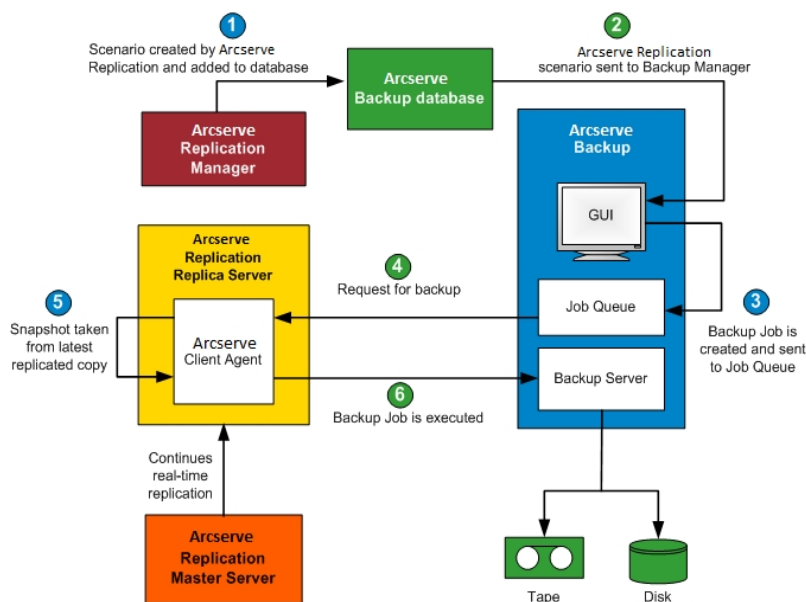
MS Exchange シナリオでは、1 つのエンティティは MS Exchange ストレージグループを表します。エンティティ名は、MS Exchange ストレージグループの名前になります。

統合されたバックアッププロセスの動作

バックアッププロセスでは、シナリオに含まれるものがすべてバックアップされます。バックアップジョブにより、シナリオを構成する各エンティティのセッションが作成されます。サポートされているシナリオは、SQL Server、MS Exchange、および File Server です。

Arcserve Backup と Arcserve Replication の統合されたバックアッププロセスは、以下の3つの基本的な機能で構成されています。

- [シナリオの作成](#)
- [ジョブの作成](#)
- [ジョブの実行](#)



シナリオの作成

Arcserve Replication マネージャでシナリオを作成し、関連情報が Arcserve Backup データベースに挿入されます。既存のシナリオについては、Arcserve Replication マネージャの [ツール]メニューから [Arcserve Backup サーバの更新] オプションを使用することによって、関連情報を Arcserve Backup データベースに挿入できます。その後、Arcserve Backup がデータベースを照会してシナリオが存在することを認識し、バックアップ マネージャの GUI 経由でユーザーにシナリオを提示します。Arcserve Replication シナリオは、バックアップ マネージャの [ソース] タブに一覧表示されます。バックアップ マネージャからシナリオを選択すると、対応するプロパティが表示され、選択したシナリオについての詳細情報が表示されます。これらの表示されるプロパティには、シナリオ名、シナリオの種類、およびマスタ サーバとレプリカ サーバに関するその他の関連情報が含まれます。

注: Arcserve Replication シナリオには、常に最低 1 台のマスタ サーバと 1 台のレプリカ サーバが含まれます。また、1 台のサーバで複数の独立したシナリオを実行できます。

Arcserve Backup データベースからシナリオを削除する場合は、バックアップ マネージャの GUI の [プロパティ] 画面から [オブジェクトの削除] オプションを使用します。

[オブジェクトの削除] を使用すると、シナリオは Arcserve Backup データベースからのみ削除され、Arcserve Replication マネージャからは削除されません。

詳細情報:

[統合されたバックアッププロセスの動作](#)

[ジョブの作成](#)

[ジョブの実行](#)

ジョブの作成

Arcserve Backup で、ユーザ指定のソース、デスティネーション、およびその他の一般的なバックアップオプションの設定でバックアップジョブが作成されます。バックアップジョブを開始しようとする、2組のセキュリティ認証情報(ユーザ名とパスワード)の入力を求められます。2組の認証情報のうちの1組は、Arcserve Backup サーバがレプリカサーバのエージェントにアクセスするためのもので、もう1組は、Arcserve Backup がマスタサーバにログインしてバックアップの準備をするためのものです。必要なセキュリティ認証を入力すると、バックアップジョブがジョブキューにサブミットされ、スケジュールされた時刻に実行されます。

詳細情報:

[統合されたバックアッププロセスの動作](#)

[シナリオの作成](#)

[ジョブの実行](#)

ジョブの実行

スケジュールされた時刻になると、Arcserve Backup がレプリカ サーバで実行中のエージェントに接続し、バックアップされたシナリオのレプリケート データをホストしているボリュームのシャドウコピーを作成するように Arcserve Replication に要求します。要求を受信すると、シャドウコピーを作成するために、シナリオの継続的なリアルタイムレプリケーションが一時的に中断されます。シャドウコピーが作成されると、レプリカ サーバでのリアルタイムレプリケーションが再開され、レプリカ サーバで実行中のエージェントがシャドウコピーからのバックアップを実行します。Arcserve Backup サーバは、レプリカ サーバにインストールするか、別の専用サーバとしてインストールすることができます。

SQL Server シナリオと Exchange シナリオでは、バックアップが完了するとシャドウコピーは保存され、保存シャドウコピーの最大数に達した場合のみ削除されます。Arcserve Replication では、デフォルトで 10 個のシャドウコピーが作成され保存されるように設定されています。10 を超えると、一番古いシャドウコピーが一番新しいシャドウコピーに置き換えられます。保存されるシャドウコピーの数は、Arcserve Replication マネージャの「保存に設定するシャドウコピー数」プロパティで変更できます。

注：保存するシャドウコピー数の設定の詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

ファイルサーバシナリオでは、バックアップが完了すると、シャドウコピーが保存され、削除されることはありません。

アシュアード リカバリ(回復検証) が設定されたシナリオをバックアップする場合は、アプリケーションの整合性が保たれるので、リストア後にアプリケーションをリカバリする必要はありません。中断を有効にして(アシュアード リカバリを設定せずに)シナリオをバックアップする場合は、バックアップ時のアプリケーションの状態によっては、リストア後にアプリケーションをリカバリする必要があります。

レプリカ サーバでバックアップを実行することで、マスタ サーバでは、中断したりパフォーマンスが低下したりすることなく稼働し続けることができます。また、すべてのバックアップカタログ情報は、バックアップがマスタ サーバに実行されたかのように記録されます。そのため、データのリストアビューは、常にマスタ サーバから直接バックアップを行った場合と同じになります。Arcserve Backup を使用して、バックアップデータをマスタ サーバまたはレプリカ サーバに復元できます。

さらに、マルチストリームのバックアップジョブでは、各 Arcserve Replication シナリオは、子ジョブとしてバックアップされます。1 つのノードに複数のシナリオが含まれている場合、マスタジョブによって分割され、それぞれの子ジョブによって 1 つのシナリオがバックアップされます。

詳細情報：

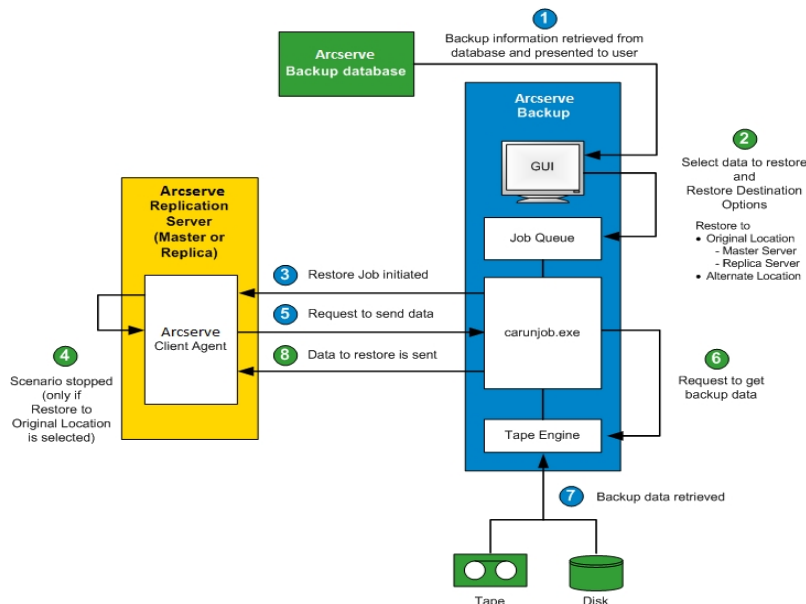
[統合されたバックアッププロセスの動作](#)

[シナリオの作成](#)

[ジョブの作成](#)

統合されたリストアプロセスの動作

リストアプロセスでは、Arcserve Backup を使用して、マスタ サーバからレプリケートされたデータをリカバリし、バックアップします。SQL Server シナリオおよび MS Exchange シナリオでは、フルシナリオのリストアのみがサポートされます。File Server シナリオでは、フルシナリオ リストアまたはファイル、ディレクトリ、およびボリューム単位のリストアがサポートされます。



Arcserve Backup により、バックアップされたマシンの一覧がデータベースから取得され、リストアマネージャの GUI の [ソース] タブに表示されます。リストアマネージャからソースを選択すると、対応するプロパティも表示され、選択したソースについての詳細情報が表示されます。ソースを選択した後、リストアする場所も選択する必要があります。保存場所を選択する際は、データを元の場所にリストアする方法と別の場所にリストアする方法があります。[ファイルを元の場所にリストア] (デフォルト) を選択した場合、マスタサーバ、またはレプリカサーバのいずれの場所にリストアするかを選択する必要があります。[ファイルを元の場所にリストア] を選択しない場合、別の場所を参照して指定する必要があります。

レプリカサーバにリストアする場合は、対応するアプリケーションが実行中でないことを必ず確認し、現在使用中のファイルのリストアを避けるようにしてください。マスタサーバにリストアするときには、Arcserve Backup Client Agent がインストールされていて稼働中であることを確認してください。

SQL Server および MS Exchange の場合、対応するアプリケーションの実行中に、Arcserve Replication シナリオを元の場所にリストアすると、リストアされたファイルは一時的に拡張子 .TMP で作成されます。リストアジョブが正常に終了すると、既存のアクティブなファイルを上書きおよび置き換えるためにサーバの再起動を求め

られます。サーバが再起動すると、リストアされたファイルが元のデータベースにマージされます。対応するアプリケーションが実行中でない場合、元の場所へのリストアプロセスの際に一時的なファイルは作成されないため、サーバを再起動する必要はありません。

クラスタ環境にインストールされている SQL Server は、再起動できないため、元の場所へリストアを実行する前にアプリケーション リソースを停止する必要があります。

リストアジョブをサブミットすると、以下のオプションに従ってセキュリティ認証情報 (ユーザ名とパスワード) の入力を求められます。

- [ファイルを元の場所にリストア]を選択した場合、指定したリストアオプションによっては、Arcserve Backup がマスタサーバのエージェントと通信できるように (マスタにリストアする場合) 1 組の認証情報を入力するか、マスタサーバとレプリカサーバの両方と通信できるように (レプリカにリストアする場合) 2 組の認証情報を入力する必要があります。
- [ファイルを元の場所にリストア]を選択していない場合、リストアを実行するマシンのエージェントにログインするために 1 組の認証情報を入力する必要があります。

必要なセキュリティ認証情報を入力すると、リストアジョブがジョブキューにサブミットされ、スケジュールされた時刻に実行されます。

スケジュールされた時刻になると、Arcserve Backup が Arcserve Replication サーバ (指定したマスタまたはレプリカ) で実行中のエージェントに接続し、データの要求を開始します。[ファイルを元の場所にリストア]を選択した場合、エージェントがデータを要求する前に、シナリオの継続的なレプリケーションが一時的に中断されます。シナリオのレプリケーションを中断することで、マスタサーバとレプリカサーバ間のデータの一貫性を保つことができます。マスタサーバのデータが、レプリカサーバにリストアされたデータとは異なっていたり、破損していることがあります。この場合、継続的なレプリケーションプロセスが中断していない場合は、レプリカサーバに新たにリストアされたデータが、マスタサーバの破損データで上書きされます。シナリオのレプリケーションを停止できない場合、リストアジョブは失敗します。必要に応じて、[グローバルオプション]を選択して、シナリオを停止できない場合でもリストアジョブを続行できます。

Arcserve Replication サーバで実行中のエージェントが Arcserve Backup に接続し、データの送信を要求すると、格納場所 (テープまたはディスク) からデータが取得され、指定されたデスティネーションに送信されます。このデータの要求と送信プロセスは、バックアップからすべてのデータがリストアされるまで繰り返されます。リストアが完了すると、レプリカサーバのデータをマスタサーバにリストアすることができます。

第2章: Arcserve Replication と Arcserve Backup のインストールおよび設定

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup および Arcserve Replication のインストール方法	28
統合の環境設定	29
RBO(リモート ブランチ オフィス) の環境設定	32

Arcserve Backup および Arcserve Replication のインストール方法

以下の Arcserve Backup および Arcserve Replication のインストール手順は、製品が統合されている場合でも変わりません。

- Arcserve Backup のインストールを通常通り、Arcserve Backup サーバとして指定したサーバで実行します。

注： Arcserve Backup のインストールの詳細については、「[Arcserve Backup 実装ガイド](#)」を参照してください。

- マスタ サーバおよびレプリカ サーバとして指定したサーバで、Arcserve Replication の通常のインストールを実行します。

バックアップを実行するには、以下の環境が設定されている必要があります。

- レプリカ サーバは、Arcserve Backup と Arcserve Replication の動作要件に従って設定された Windows サーバである必要があります。
- マスタ サーバは、Arcserve Replication の動作要件に従って設定された Windows サーバである必要があります。

注： Arcserve Replication のインストールの詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

統合の環境設定

Arcserve Backup のインストール場所に応じて 2 つの統合セットアップを選択できます。1 つは、レプリカ サーバに Arcserve Backup サーバをインストールする設定で、もう 1 つは、Arcserve Backup サーバが別のスタンドアロン サーバとして存在している設定です。

以下の表は、Arcserve Backup と Arcserve Replication の統合のサポート状況を、バージョンの組み合わせによって示したものです。

Arcserve Backup	Arcserve Replication	総合のサポート
18.0	r16.5 SP7	○
r17.5	r16.5 SP7	○
r17	r16.5	○
r16.5	r16.5、r16、r16 SP1、r16 SP2、r15、r15.1、r15.2	○

また、マスタ サーバに Arcserve Backup Client Agent をインストールするかどうかも決定します。

マスタ サーバにクライアント エージェントをインストールする利点は以下のとおりです。

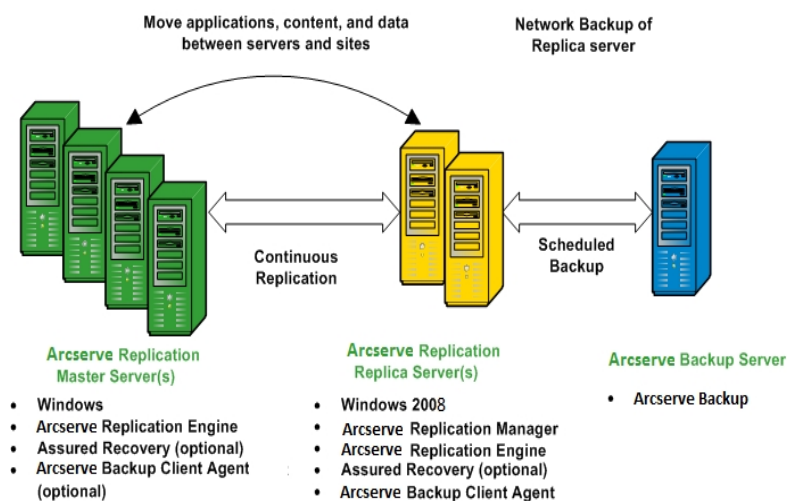
- Arcserve Backup サーバから直接マスタ サーバにリストアできます。
クライアント エージェントがマスタ サーバにインストールされていない場合、レプリカ サーバをリストアし、Arcserve Replication の「リバースレプリケーション」(レプリカからマスタ)を実行して、次にスイッチバックしたときにマスタ サーバが完全に最新の状態であるようにする必要があります。
- ベアメタルリカバリを実行できます。これにより、致命的な障害または惨事後で、何も無い状態からサーバを再構築し、サーバのアプリケーションおよびデータも併せて完全にリカバリすることが可能になります。

スタンドアロンの Arcserve バックアップ サーバの設定

このセットアップには、Arcserve Backup サーバがレプリカ サーバとは別のスタンドアロンマシンにインストールされている場合の環境設定が含まれます。この環境設定の利点は以下のとおりです。

- バックアップがレプリカ サーバの機能に影響しません。
- Arcserve Backup プロセスが別のマシン上で実行されているためレプリケーションが速くなります。
- この環境設定は、複数のリモート ブランチ オフィス(RBO) に対して一元化されたバックアップを実行するための要件を満たしています。

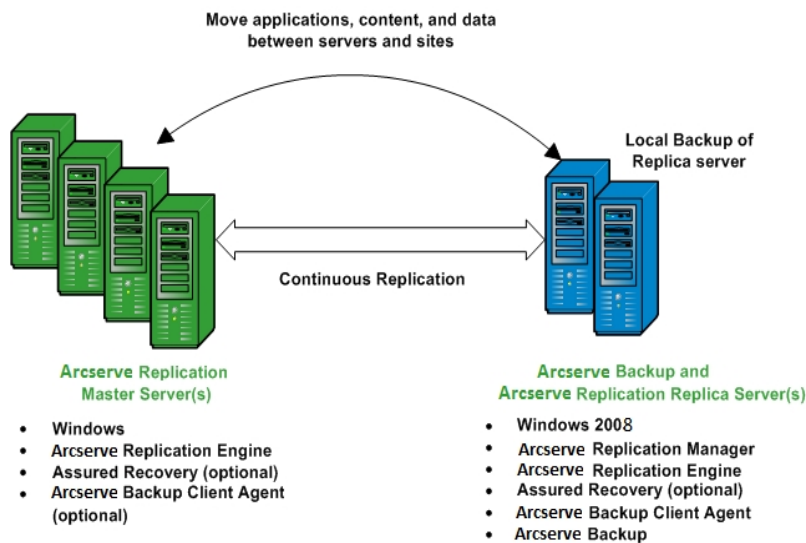
以下の図は、この環境設定の要件を示しています。



レプリカ サーバ - Arcserve Replication にインストールされている Arcserve Backup サーバの設定

このセットアップには、Arcserve Backup サーバがレプリカ サーバと同じマシンにインストールされている場合の環境設定が含まれます。この環境設定では、アクションがレプリカ サーバに対してローカルに実行されるので、バックアップおよびリストアのジョブをより迅速に実行することができます。

以下の図は、この環境設定の要件を示しています。



RBO(リモート ブランチ オフィス) の環境設定

Arcserve Backup と Arcserve Replication を統合すると、RBO (Remote Branch Offices、リモート ブランチ オフィス) サーバから CDC (Central Data Center、セントラル データ センタ) ヘデータのレプリケーションおよびバックアップができます。これらの RBO サーバは、WAN または LAN 経由で外部に接続できます。

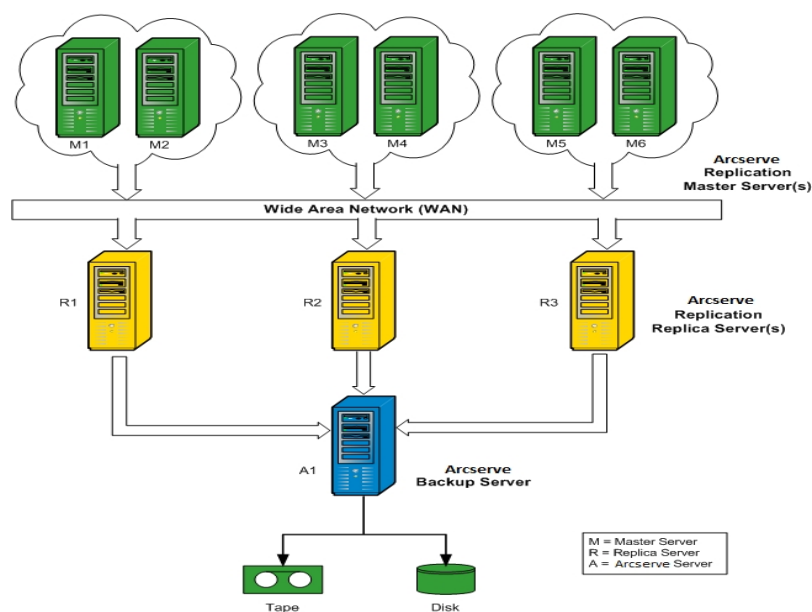
CDC を使用した RBO の利点は以下のとおりです。

- ブランチ オフィス サーバに、より良い惨事復旧と継続的なアプリケーション可用性を提供する
- 複数箇所にあるブランチオフィスのデータバックアップを、1 箇所で集中管理できる
- すべての拠点で専門の IT サポートの必要性を削減する
- 多くの異なる拠点における複数のサーバ、ストレージ デバイス、およびアプリケーションのインストールおよび維持にかかる費用を削減できる
- テープ移動に伴うセキュリティ上のリスク、オフセット テープメディア、および取り扱いコストを削減する

リモート ブランチ オフィスは、ユーザの要件および技能に応じて、さまざまな構成のレプリケーションおよびバックアップを設定できます。以下の図は、RBO の環境設定の例をいくつか示しています。

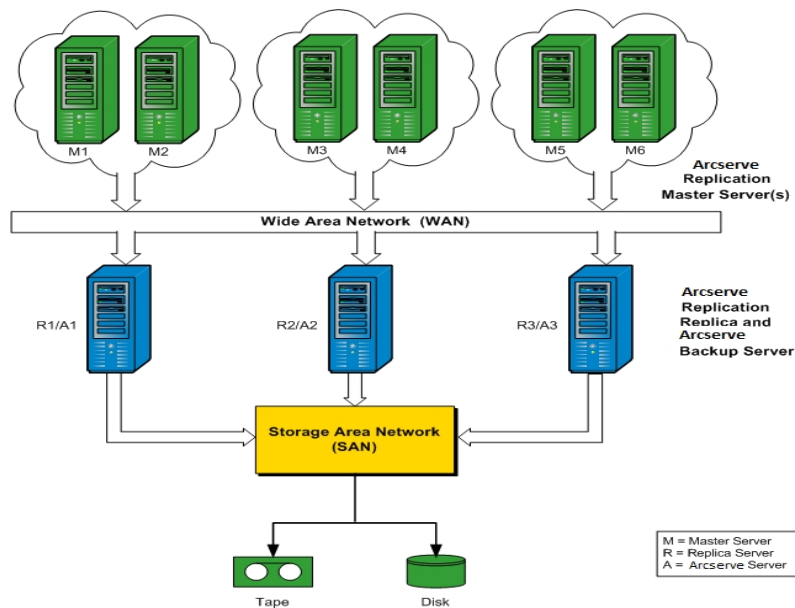
RBO 環境設定 - 例 1

この例は、複数のマスタ サーバが複数のレプリカ サーバにレプリケートされ、次にスタンドアロン Arcserve Backup サーバからバックアップされる RBO の構成を示しています。



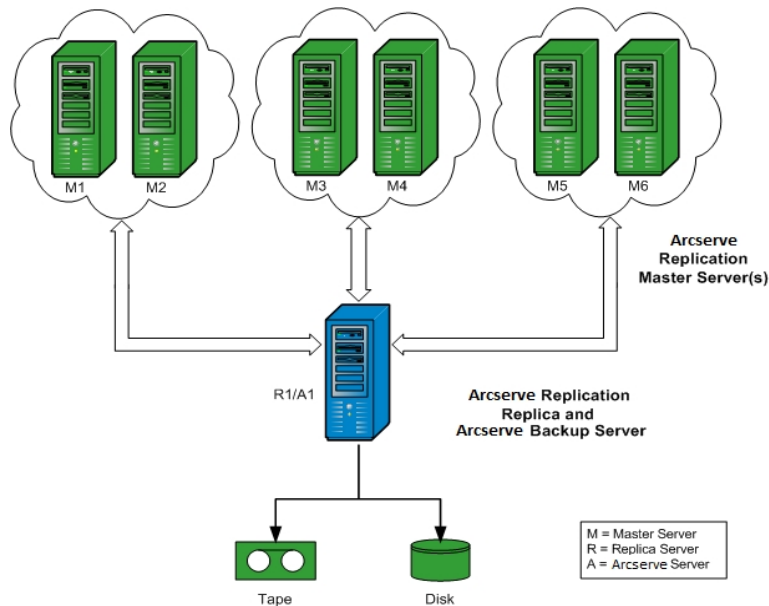
RBO 環境設定 - 例 2

この例は、複数のマスタ サーバが複数のレプリカ サーバにレプリケートされ、次に各レプリカ サーバにインストールされている Arcserve Backup サーバから共通ライブラリにバックアップされる RBO の構成を示しています。CDC を使用したリモート ブランチ オフィスのさまざまな利点に加え、この構成では、すべての Arcserve Backup サーバによるローカルバックアップを利用できる利点があります。



RBO 環境設定 - 例 3

この例は、複数のマスタ サーバが 1 台のレプリカ サーバに複製され、次にレプリカ サーバにインストールされている Arcserve Backup サーバからバックアップされる RBO の構成を示しています。この環境設定の欠点は、Arcserve Replication レプリカと Arcserve Backup サーバが複数サイトから複数サーバのすべてのレプリケーションおよびバックアップを実行することによりボトルネックが発生することです。



第3章: 統合されたバックアップ ジョブの実行

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

統合されたバックアップ ジョブ	38
Arcserve Replication シナリオの作成	39
Arcserve Replication シナリオの実行	42
バックアップ ジョブの作成および実行	44

統合されたバックアップ ジョブ

Arcserve Backup と Arcserve Replication を統合すると、継続的なデータ保護を実現し、その保護されたデータをバックアップできるという二重の利点があります。このように統合することにより、Arcserve Replication は、マスタ サーバからレプリカサーバへのリアルタイムの継続的なデータ保護を提供し、Arcserve Backup は、この複製されたデータをレプリカサーバから Arcserve Backup サーバにバックアップします。

統合されたバックアップを実行するプロセスには、以下の処理が含まれます。

- シナリオの作成
- シナリオの実行
- バックアップ ジョブの作成および実行

Arcserve Replication シナリオの作成

Arcserve Replication シナリオは、システムの処理を管理するための基本です。シナリオは、保護するアプリケーションおよびデータ、アプリケーションやデータがある場所、データをレプリケートする場所、およびその他のシナリオ固有のオプションを記述する仕組みです。Arcserve Replication シナリオのバックアップを実行する前に、バックアップされるシナリオを作成する必要があります。

Arcserve Replication シナリオを作成する方法

1. Arcserve Replication の [開始] メニューまたは Arcserve Backup の [クイックスタート] メニューから Arcserve Replication マネージャを起動します。

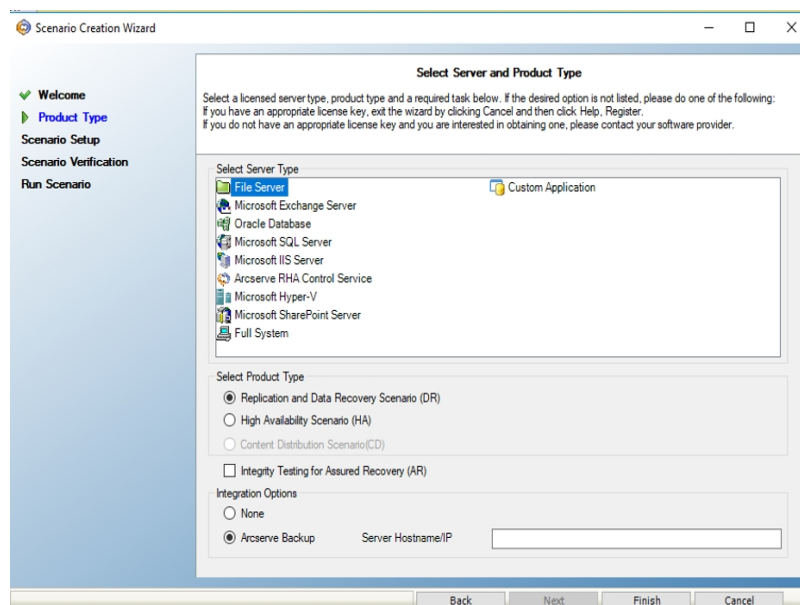
注：レプリケーション シナリオおよびシナリオの作成オプションの詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

2. ツールバーの [新規] アイコンをクリックします。

[新規シナリオ ウィザードへようこそ] 画面が表示されます。

3. [新規シナリオの作成] を選択し、[次へ] をクリックして新規シナリオを作成します。

[サーバおよび製品タイプの選択] 画面が表示されます。

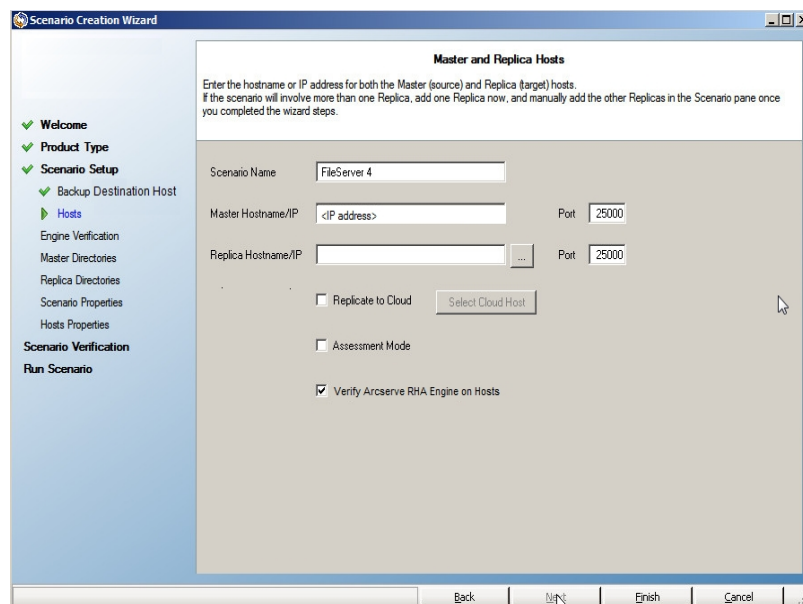


4. [Arcserve Backup] オプションを選択し、整合性テストを含めるかどうか選択して、シナリオのバックアップ先である Arcserve Backup サーバの名前を入力します。[サーバタイプ]、[製品タイプ]、および [アシュアード リカバリ] (選択可能な場合) に適切な値を選択します。

注：Arcserve Backup はファイル サーバ、Microsoft Exchange、および SQL Server のシナリオのみをサポートします。

5. [次へ]をクリックします。

[マスタおよびレプリカ ホスト]画面が表示されます。



6. 作成しているシナリオのシナリオ名、およびマスタ サーバとレプリカ サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。各ホスト名 フィールドの隣にある参照ボタンを使用して、対応する場所を選択することもできます。

バックアップされるシナリオが作成され、関連する情報が Arcserve Backup データベースに挿入されました。

注：既存のシナリオでは、Arcserve Backup データベースの関連情報を更新できません。これは、Arcserve Replication マネージャの [ツール]メニューの [Arcserve Backup サーバの更新]オプションを使用して行います。

7. [次へ]をクリックします。

注：File Server または Microsoft Exchange Server をシナリオの種類として選択している場合は、他の Arcserve Replication シナリオの作成プロセスと同じ要領で作成を続けます。シナリオ作成の詳細な手順については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

SQL Server をシナリオの種類として選択している場合は、[マスタ環境設定]画面が表示されます。

[マスタ環境設定]画面には、マスタホストのすべての SQL Server データベース、および [選択したルート ディレクトリにある新規データベースをレプリケート]オプションのチェックボックスが表示されます。

このオプションを選択した場合、シナリオ作成後に SQL Server ルート ディレクトリで新しいデータベースを作成すると、Arcserve Replication により自動的に新しいデータベースがレプリカ サーバにレプリケートされます。ただし、新たに作成されたデータベースは Arcserve Backup データベースには含まれていないので、Arcserve Backup ではバックアップされません。新しいデータベースをバックアップするには、Arcserve Replication 自動検出機能を実行してシナリオを変更する必要があります。これにより、新しいデータベースが認識され、Arcserve Backup データベースに含まれます。

注: Arcserve Replication の自動検出機能では、(ローカルまたはネットワーク上に存在する) データベースまたはメール サーバのすべてのデータベース オブジェクト、関連ファイル、およびディレクトリが自動的に検出されます。自動検出機能の詳細な手順については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

8. シナリオを正しく設定した後、[次へ]をクリックして、他の Arcserve Replication シナリオの作成プロセスと同じ要領でシナリオの作成を続けます。

注: シナリオ作成の詳細な手順については、「Arcserve RHA 管理者ガイド」を参照してください。

重要: シナリオが Arcserve Backup に追加された後でマスタ サーバに以下の変更を加えた場合、それらの変更が Arcserve Backup によって確実に認識されるようにするため、追加の手順を実行する必要があります。

- Microsoft SQL Server マスタ サーバへの新しいデータベースの追加
- Microsoft Exchange Server マスタ サーバへの新しいストレージ グループの追加

マスタ サーバを変更した後

1. 実行中のシナリオを停止します。
2. [自動検出]を選択して保存します。
3. シナリオを再開します。

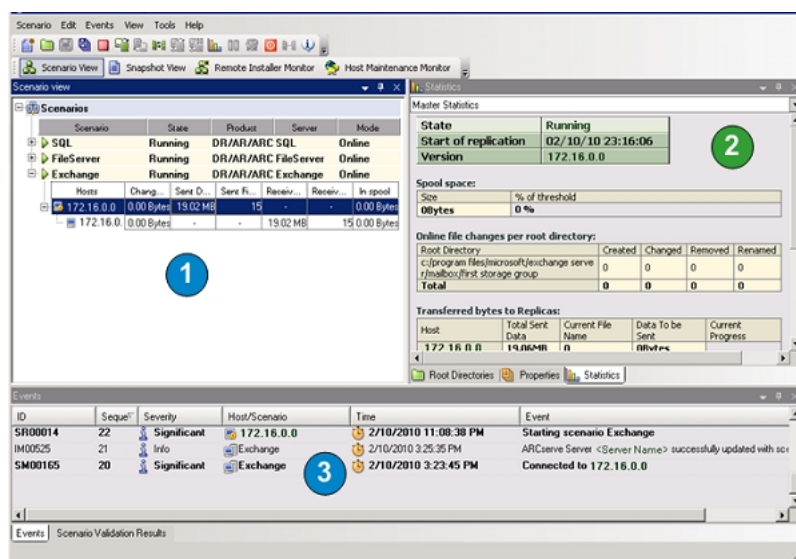
新しいデータベースまたはストレージ グループが Arcserve Backup マネージャに表示されます。

Arcserve Replication シナリオの実行

Arcserve Replication では、ユーザ定義シナリオのコンテキスト内でバックアップが作成され維持されます。Arcserve Replication シナリオをバックアップする前に、シナリオを実行して Arcserve Backup データベースに追加する必要があります。

Arcserve Replication シナリオの実行方法

1. Arcserve Replication マネージャ インターフェースから、バックアップするシナリオを選択します。
 - シナリオとシナリオのステータスが左側のペインに表示されます。
 - 右ペインには、ディレクトリ(およびサブディレクトリ)とそこに含まれるファイルを表示する、対応するフレームワークが表示されます。
 - 下にある [イベント] ペインに、ホストから受け取った重大なイベント、警告、およびエラーに関する情報が表示されます。



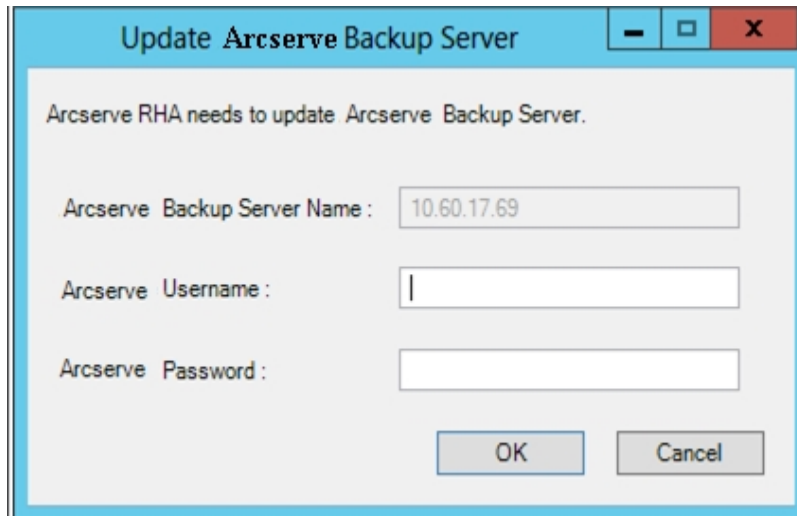
1 Scenario

2 Framework

3 Events

2. ツールバーの [シナリオの実行] アイコンをクリックします。

Arcserve Backup Server 接続ダイアログ ボックスにサーバの名 前が表示されます。

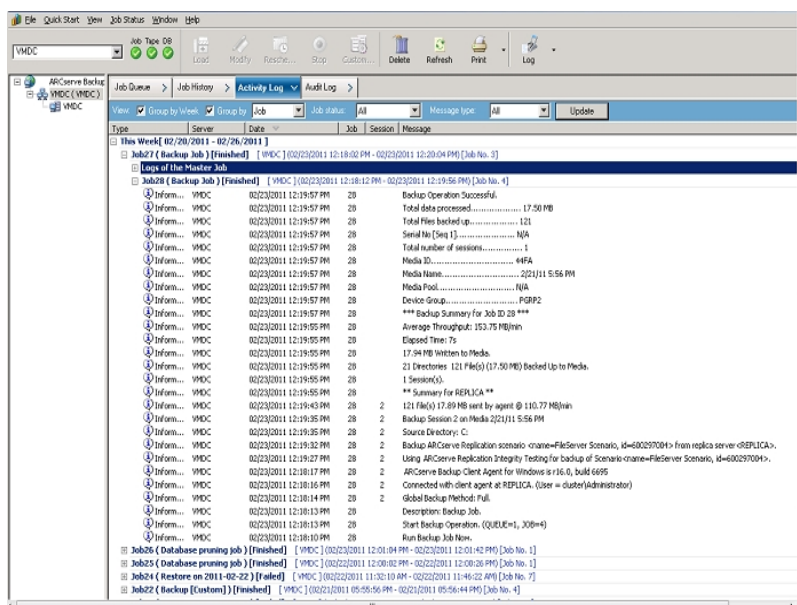


3. Arcserve Backup Server Connection 接続ダイアログ ボックスで、正しいユーザ名とパスワードを入力して、Arcserve Backup サーバがレプリカ サーバのエージェントと通信できるようにします。

選択したシナリオが Arcserve Backup データベースに追加され、バックアップできるようになりました。

注: Arcserve Replication バックアップは、がレプリケーション モード(シナリオ名の隣に緑色の矢印のアイコンが表示されます) のときのみ実行できます。

Arcserve Backup データベース内でのシナリオレコードの作成、削除、または変更に関連した Arcserve Replication 処理を反映するため、Arcserve Backup アクティビティログが更新されます。



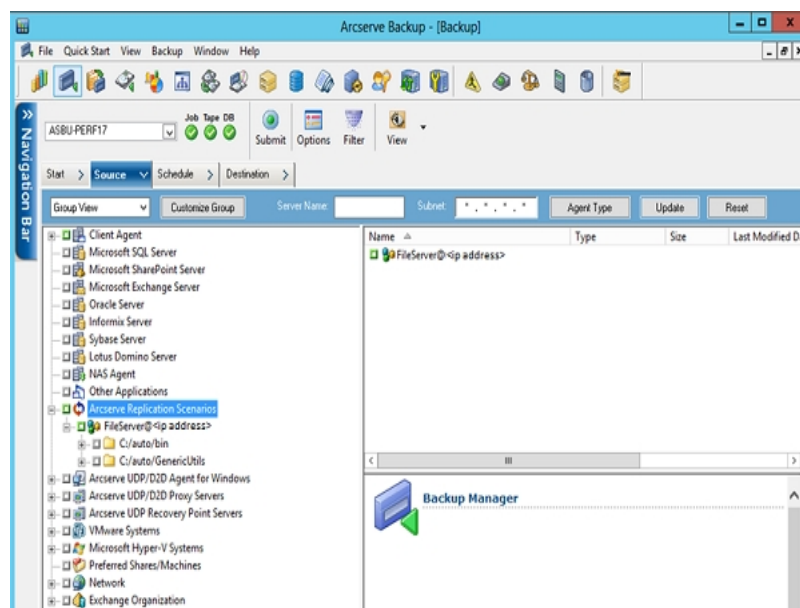
バックアップ ジョブの作成および実行

Arcserve Replication シナリオが Arcserve Backup データベースに追加されると、バックアップ ジョブを作成できます。

バックアップ ジョブを作成して実行する方法

1. Arcserve Backup からバックアップ マネージャにアクセスして、[ソース]タブを選択します。

[ソース]タブの左側のペインに、Arcserve Backup データベースに登録され、バックアップ可能なすべての Arcserve Replication シナリオが一覧表示されます。



2. Arcserve Replication シナリオ ディレクトリを展開して、バックアップするシナリオを選択します。

[セキュリティ]ダイアログ ボックスが開き、レプリカ サーバで稼働している Arcserve Backup Client Agent にログインするためのユーザ名とパスワードの入力を求められます。

3. ユーザ名とパスワードを入力して [OK] ボタンをクリックします。

注: Arcserve Backup では、23 文字を超えるパスワードでのシステムへのログインをサポートしていません。ログインしようとしているシステムのパスワードが 23 文字を超える場合は、エージェント システムにおいてパスワードが 23 文字以下になるように修正すると、エージェント システムにログインできます。

認証情報が承認されると、バックアップするシナリオを選択できます。

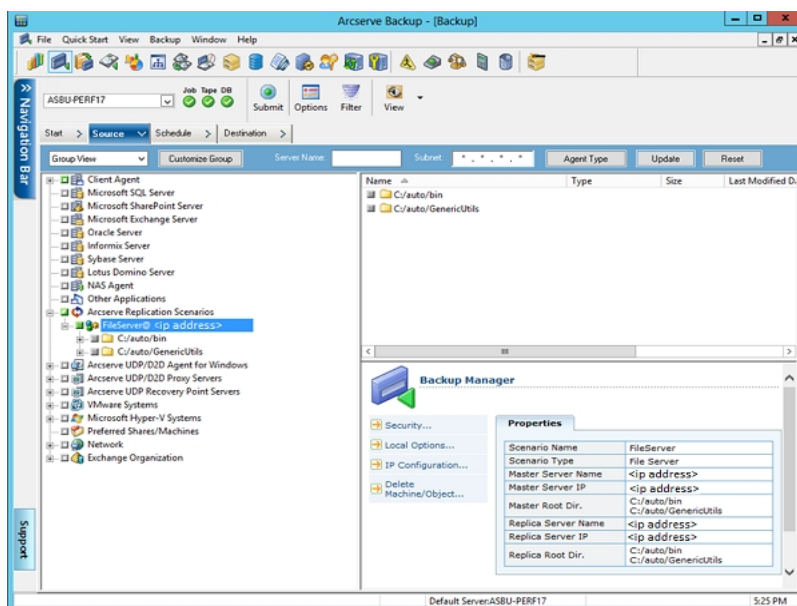
4. シナリオを展開して、バックアップ シナリオ内にあるエンティティを表示します。

シナリオが関連するエンティティを表示するために展開されます。個々のエンティティは表示のみが可能で、バックアップ用に選択することはできません。サポートされているシナリオには、File Server、MS Exchange、および SQL Server があります。

注：以下の画面のように、Arcserve Backup サーバに格納されているシナリオの種類 (File Server、MS Exchange、または SQL Server) によって、各シナリオで表示されるエンティティは異なります。

5. バックアップするファイルを選択します。

以下のように、選択したシナリオの隣にあるマーカボックスが緑色になり、対応するシナリオのプロパティがバックアップ マネージャの右側のペインに表示されます。バックアップはすべてフルバックアップになります (増分や差分ではありません)。



バックアップ ジョブにより、シナリオを構成するエンティティごとにセッションが作成されます。エンティティの詳細レベルは、シナリオの種類 (File Server、MS Exchange、または SQL Server) によって異なります。

マルチストリームのバックアップ ジョブの場合、各 Arcserve Replication シナリオは、子ジョブとしてバックアップされます。1つのノードに複数のシナリオが含まれている場合、マスタジョブによって分割され、それぞれの子ジョブによって1つのシナリオがバックアップされます。

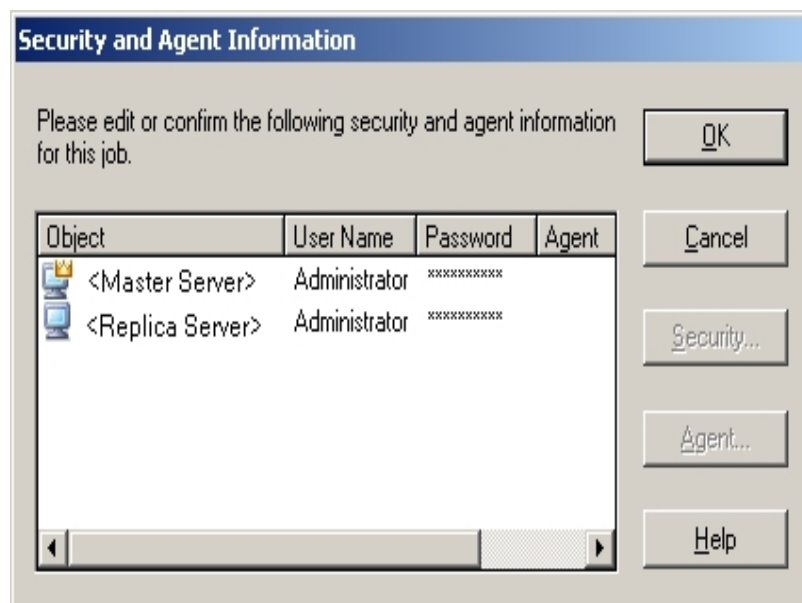
注：シナリオ全体のバックアップのみが可能です。

6. 関連する [ステージング]、[デスティネーション]、[スケジュール]、[グローバルオプション] の選択、および他のバックアップ関連オプションの選択を行います。複数の Arcserve Replication シナリオを選択したり、Arcserve Replication 以外のシナリオをバックアップに含めることもできます。

注：これらのオプションの詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

- バックアップ マネージャから [サブミット] をクリックして、バックアップを開始します。

[セキュリティおよびエージェント情報] ダイアログ ボックスが開き、選択したシナリオに関する情報が表示されます。



各 Arcserve Replication シナリオには、2 組の認証情報が表示されます。1 つはマスタ サーバ用で、もう 1 つは関連するレプリカ サーバ用です。サーバ名の横に表示されるアイコンは、サーバがマスタ(アクティブ)  であるかレプリカ(スタンバイ)  であることを示します。

 マスタ サーバの認証はマスタ サーバ上の Arcserve Replication エンジンにログインするために使用され、レプリカ サーバの認証はレプリカ サーバで実行中の Arcserve Backup Client Agent にログインするために使用されます。

注：マスタ サーバの認証情報は、PFC (Preflight Checklist、プレフライト チェックリスト) ユーティリティでは確認できません。

- 該当するサーバを選択して、[セキュリティ] ボタンをクリックします。
選択したサーバに対して [セキュリティ] ダイアログ ボックスが表示されます。
- ユーザ名とパスワードを入力して [OK] をクリックします。

注：Arcserve Backup では、23 文字を超えるパスワードでのシステムへのログインをサポートしていません。ログインしようとしているシステムのパスワードが 23 文字を超える場合は、エージェント システムにおいてパスワードが 23 文字以下になるように修正すると、エージェント システムにログインできます。

[ジョブのサブミット] ダイアログ ボックスが表示されます。

通常どおりバックアップ手順を続けます。この手順の詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

10. バックアップ手順が完了したら、[OK]をクリックしてバックアップジョブをサブミットします。

選択したオプションに応じて、バックアップジョブはすぐに実行されるか、ジョブキューに入れられスケジュールされた時刻に実行されます。

重要: バックアップジョブの実行中にマネージャにアクセスすると、ポップアップメッセージが表示され、指定したシナリオが別のホストでロックされているので、シナリオを使用できるようにするには [OK] をクリックするよう求められます。Arcserve Replication [OK] をクリックすると、バックアップジョブに失敗します。それは、Arcserve Backup でシナリオが制御されなくなったからです。バックアップジョブを正常に完了させるには、Arcserve Replication マネージャを開かない、[キャンセル] をクリックする、またはメッセージを無視して [OK] をクリックしない、のいずれかを行う必要があります。

注: スイッチオーバーが発生した場合、Arcserve Backup は Arcserve 高可用性 (HA) シナリオに追加されているサーバをバックアップできません。シナリオを逆方向で実行している間、バックアップジョブは失敗します。スイッチバックが発生し、シナリオが順方向で実行されると、Arcserve Backup はこれらのサーバを正常にバックアップできます。

第4章: 統合されたリストア ジョブの実行

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

統合されたリストア ジョブ	50
Arcserve Replication フェールオーバーを使用したリストア	51
Arcserve Replication データ リwindを使用したリストア	52
Arcserve Backup を使用したリストア	53

統合されたリストアジョブ

Arcserve Backup と Arcserve Replication の統合により、バックアップされたデータを、さまざまな方式を使用して多様なソースからリストアできるようになります。

統合されたリストアを実行するプロセスには、以下の処理が含まれます。

- Arcserve Replication フェールオーバーを使用したリストア
- Arcserve Replication データリワインドを使用したリストア
- Arcserve Backup を使用したリストア

詳細情報：

[Arcserve Replication フェールオーバーを使用したリストア](#)

[Arcserve Replication データリワインドを使用したリストア](#)

Arcserve Replication フェールオーバーを使用したリストア

フェールオーバーは、マスタ サーバ上で保護されているアプリケーションの障害を検出し、基本的にはデータも時間も全く無駄にせずに指定されたレプリカ サーバに (自動的にまたは手動で) 切り替える機能です。マスタ サーバで障害が発生した場合、またはメンテナンスのためにシャットダウンする必要がある場合、同期化された(ローカルまたはリモートにある) レプリカが瞬時に自動的にマスタ サーバに切り替わります。

フェールオーバー機能を使用した Arcserve Replication のリストアの利点は、マスタ サーバでハードウェア障害があっても、即座にデータ処理を再開できることです。データの損失やサービスの中断なしに、レプリカ サーバからすぐにデータがリカバリされます。

自動フェールオーバーは、マスタ サーバで実行中のアプリケーションが自動的にレプリカ サーバにスイッチして実行されるように設計されています。このプロセスは完全に透過的にすることも、ユーザの操作を必要とするように設定することもできます。

手動フェールオーバーはさまざまな理由で開始されます(通常はメンテナンス目的で行われます) が、最終的にはマスタ サーバからレプリカ サーバにアプリケーション プロセスが切り替えられます。

注: フェールオーバー機能を使用した、レプリカ サーバからの損失データのリカバリ手順の詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

Arcserve Replication データ リwindを使用したリストア

データのリwindは、ファイルを破損前の時点 (リwind ポイント) までリwind できるリストア方式です。レプリケーションでは継続的にソース データがレプリカ サーバに更新されるので、レプリカ サーバには常にマスタ サーバと同じデータが格納されています。データの破損が発生した場合、レプリカ サーバ内のデータも破損しているため、レプリカ サーバから最新のファイルをリカバリしても役に立ちません。これらのリwind ポイントは、イベントまたは処理をマークするリwind ログ内のチェックポイントとして機能します。格納される実際の情報には、リwind ポイントがアクティブになった場合にイベントを取り消す処理が含まれます。データ リカバリでは、リwind ログ内のこれらのリwind ポイントまたはブックマークを使用して、現在のデータが以前の状態にリセットされます。このビルトイン リwind 技術はレプリカ サーバで機能するので、以前の状態への「データのリwind」はレプリカ サーバでのみ実行できます。

データのリwind 機能を使用した Arcserve Replication リストアの利点は、リカバリが高速であること、リカバリ可能なデータを非常に詳細に指定できること、およびアプリケーション対応のレプリケーションとリカバリを使用できることです。

注：データのリwind 機能を使用した、レプリカ サーバからの損失データのリカバリ手順の詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

Arcserve Backup を使用したリストア

Arcserve Replication マスタ サーバから Arcserve Replication レプリカ サーバにレプリケートされ、Arcserve Backup でバックアップされたデータは、以下の方式を使用して回復できます。

- セッション単位でリストア
- ツリー単位でリストア
- 照会単位でリストア

レプリカ サーバにリストアする場合は、対応するアプリケーションが実行中でないことを必ず確認し、現在使用中のファイルのリストアを避けるようにしてください。マスタ サーバにリストアするときには、Arcserve Backup Client Agent がインストールされていて稼働中であることを確認してください。

注：SQL Server シナリオおよび MS Exchange シナリオの場合、フルセッションリストアのみサポートされています。File Server シナリオの場合、特定のファイル、ディレクトリ、またはボリュームの細かいリストアがサポートされています。

また、使用しているリストア方式に関係なく、関連する [スケジュール]、[グローバル] オプションを選択したり、他のリストア関連のオプションを選択できます。これらのリストア オプションの詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

詳細情報：

[Arcserve Replication 固有のグローバルリストア オプションの設定](#)

[セッション単位でリストア](#)

[ツリー単位でリストア](#)

[照会単位でリストア](#)

Arcserve Replication 固有のグローバルリストアオプションの設定

リストア マネージャには、選択するリストア方式には関係なく設定可能な Arcserve Replication 固有のグローバルリストアオプションが搭載されています。

Arcserve Replication 固有のグローバルリストアオプションを設定する方法

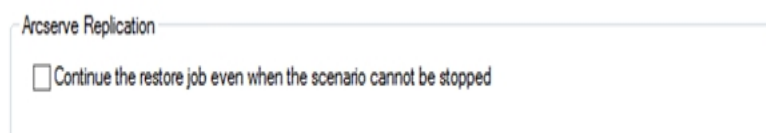
1. [リストア マネージャ] ウィンドウで、[オプション] ツールバー ボタンをクリックします。
[グローバル オプション] ダイアログ ボックスが表示されます。

2. [操作] タブを選択します。

[操作] ダイアログ ボックスが開き、Arcserve Replication 固有のオプション [シナリオを停止できない場合でもリストアジョブを継続する]が表示されます。

デフォルトではこのオプションはオフになっています。つまり、リストアプロセス中に Arcserve Replication でシナリオを停止できない場合は、ジョブは正常に終了しません。このオプションを選択すると、Arcserve Replication はシナリオの停止を試みますが、シナリオを停止できない場合は、リストアジョブは続行されます。このオプションには以下のようなメリットとデメリットがあります。

- このオプションをオンにすると、リストアが正常に実行される可能性が高くなります。
- しかし、このオプションをオンにすると、シナリオの実行中に継続的なレプリケーションが行われるため、マスタ サーバに問題がある場合は、その問題のデータによってレプリカ サーバのリストア データが上書されてしまいます。



セッション単位でリストア

[セッション単位]方式では、セッションを選択し、リストアするファイルとディレクトリを選択できます。メディアの名前はわかっているが、リストアしたいセッションが不明な場合は、この方法を使用します。この方法では、Arcserve Backup データベースが使用されるため、データベースエンジンが停止している場合は、このリストア方法は機能しません。

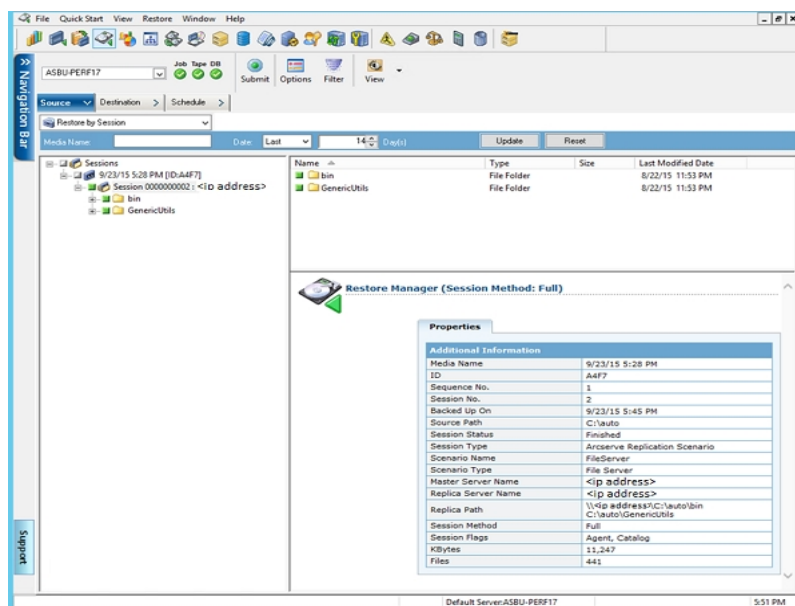
1つのバックアップジョブをセッション単位でリストアする方法

1. Arcserve Backup からリストア マネージャにアクセスして、[ソース]タブを選択し、[ソースビュー]ドロップダウンメニューから [セッション単位]を選択します。

リストア マネージャの左側のペインに、バックアップ済としてリストア可能なすべての Arcserve Replication シナリオが一覧表示されます。

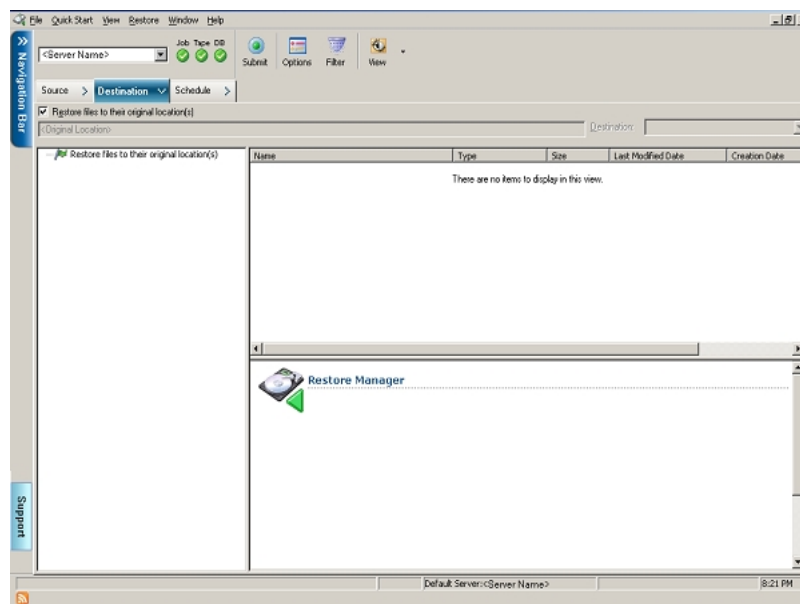
2. リストアするセッションを選択します。

対応するセッションの内容とプロパティが、リストア マネージャの右側のペインに表示されます。

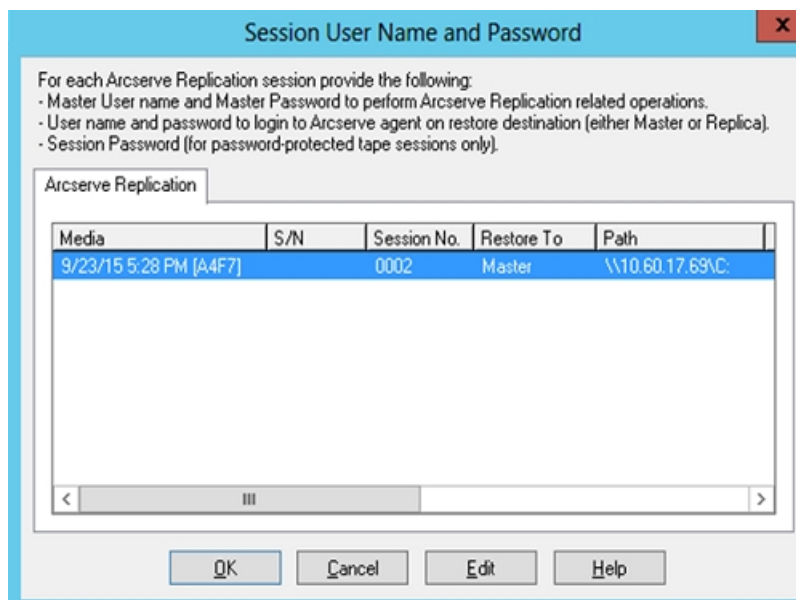


3. [ディスティネーション]タブを選択して、リストアファイルの保存場所を指定します。

ソースファイルは、以下の画面のように、元のディレクトリ構造(元の場所)または指定した任意の場所(別の場所)にリストアできます。



4. 元の場所にファイルをリストアする(デフォルト オプション)には、以下の手順に従います。
 - a. [ファイルを元の場所にリストア]オプションのチェックボックスがオンになっていることを確認したら、[サブミット]ボタンをクリックしてジョブを実行します。
[セッション ユーザ名 および パスワード]ダイアログ ボックスが開きます。



SQL Server および MS Exchange の場合、対応するアプリケーションの実行中に、Arcserve Replication シナリオを元の場所にリストアすると、リストアされ

たファイルは一時的に拡張子 .TMP で作成されます。リストアジョブが正常に終了すると、既存のアクティブなファイルを上書きおよび置き換えるためにサーバの再起動を求められます。サーバが再起動すると、リストアされたファイルが元のデータベースにマージされます。対応するアプリケーションが実行中でない場合、元の場所へのリストアプロセスの際に一時ファイルは作成されないため、サーバを再起動する必要はありません。

重要: クラスタ環境にインストールされている SQL Server は、再起動できないので、元の場所へリストアを実行する前にアプリケーション リソースを停止する必要があります。

- b. ファイルをリストアするサーバ(マスタまたはレプリカ) を選択して、選択した行をダブルクリックするか、**編集** ボタンをクリックします。

[Arcserve Replication セッション用 ユーザ名 およびパスワードの入力] ダイアログ ボックスが開きます。

- c. リストア オプション [マスタ サーバにリストアする]または [レプリカ サーバにリストアする]を選択します。

通常、レプリカ サーバへのリストアの方が効率的であり、実稼動(マスタ)サーバの処理を中断しません。[マスタ サーバにリストアする]は、高速リカバリの必要がある場合、またはマスタ サーバ環境を再構成する必要がある場合(環境が壊れている場合) のみ選択してください。

すべてのリリースの Arcserve Backup では、デフォルトでレプリカ サーバが選択されています。

注: レプリカ サーバにリストアする場合は、対応するアプリケーションが実行中でないことを必ず確認し、現在使用中のファイルのリストアを避けるように

してください。マスタ サーバにリストアするときには、Arcserve Backup Client Agent がインストールされていて稼働中であることを確認してください。

- d. サーバ セキュリティ認証 (ユーザ名 とパスワード) とセッション パスワードを入力します。

注: パスワード 管理 には、バックアップ中にセッション パスワードを暗号化するオプションが用意されており、繰り返しパスワードを入力する必要がありません。バックアップ ジョブのサブミット時に、パスワードは暗号化された形式で格納され、リストア時に自動的に使用されます。パスワード 管理 の詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

- ◆ レプリカ サーバにリストアする場合は、マスタ サーバとレプリカ サーバの両方にアクセスするためのセキュリティ認証情報を入力する必要があります。
- ◆ マスタ サーバにリストアする場合は、マスタ サーバにアクセスするためのセキュリティ認証情報を入力する必要があります。

- e. [OK] をクリックします。

[ジョブのサブミット] ダイアログ ボックスが表示されます。

- f. 他の Arcserve Backup のリストア ジョブと同様の手順でリストア作業を続けます。この手順の詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

5. ファイルを別の場所にリストアするには、以下の手順に従います。

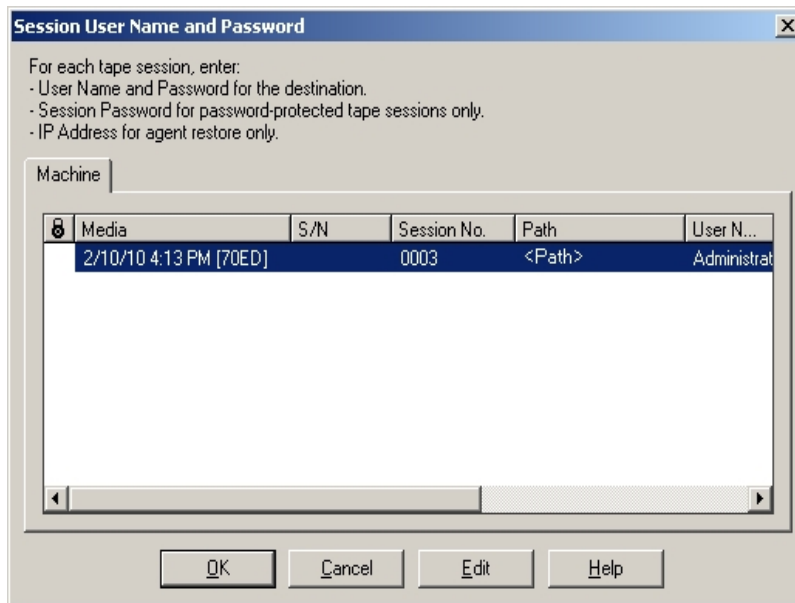
- a. [ファイルを元の場所にリストア] オプションのチェック ボックスをオフにして、デスティネーション フォルダを選択します。

リストア ファイルの保存場所が指定されました。

重要: Arcserve Replication リストアは、Windows Systems Client Agent でのみサポートされています。そのため、別のリストア場所は Windows Systems Client Agent ツリー内にあるデスティネーション マシンまたはボリュームである必要があります。Client Agent ツリーの下にないサーバ ツリーまたは他のツリーにリストアしようとする、リストア ジョブは失敗します。必要に応じて、新しいクライアント エージェント マシンを追加できます。新しいクライアント オブジェクトを追加する手順については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

- b. [サブミット] をクリックしてジョブを実行します。

[セッション ユーザ名 およびパスワード] ダイアログ ボックスが開きます。



- c. ファイルをリストアするマシンを選択して、選択した行をダブルクリックするか、**編集** ボタンをクリックします。
[ユーザ情報] ダイアログ ボックスが開きます。
- d. セキュリティ認証 (ユーザ名 とパスワード) を入力し、**OK** をクリックします。
[ジョブのサブミット] ダイアログ ボックスが表示されます。
- e. 他の Arcserve Backup のリストア ジョブと同様の手順でリストア作業を続けます。この手順の詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

ツリー単位でリストア

ツリー単位のリストアでは、Arcserve Backup でバックアップされた、表示されているファイルおよびディレクトリから、特定のディレクトリまたはドライブをリストアします。必要なデータがどのメディアに入っているかわからないが、どのマシンからそのデータがバックアップされたかがわかっている場合は、この方法を使用します。

[ツリー単位]では、バックアップの最後のインスタンスのみが表示されます。それ以外のインスタンスをすべて表示し、アクセスするには、リストアするオブジェクトを選択して [復旧ポイント] ボタンをクリックします。ツリー単位ビューには、マスタサーバ固有のビューのみ表示されます。

ツリー単位でバックアップジョブをリストアする方法

1. Arcserve Backup からリストア マネージャにアクセスして、[ソース] タブを選択し、[ソースビュー] ドロップダウン リストから [ツリー単位] を選択します。

注: 必要に応じて、復旧ポイント日を選択し、別のセッションをリストア対象として選択することができます。

リストア マネージャの左側のペインに、バックアップ済みの、リストア可能なボリューム、ドライブ、ディレクトリ、およびファイルが一覧表示されます。

2. リストアするデータを選択します。

対応する内容とプロパティが、リストア マネージャの右側のペインに表示されます。

3. [ディスティネーション] タブを選択して、リストアファイルの保存場所を指定します。ソースファイルは、元のディレクトリ構造 (元の場所) または指定した任意の場所 (別の場所) にリストアできます。

リストアファイルの保存場所が指定されました。

[セッション ユーザ名 および パスワード] ダイアログ ボックスが開きます。

SQL Server および MS Exchange の場合、対応するアプリケーションの実行中に、Arcserve Replication シナリオを元の場所にリストアすると、リストアされたファイルは一時的に拡張子 .TMP で作成されます。リストアジョブが正常に終了すると、既存のアクティブなファイルを上書きおよび置き換えるためにサーバの再起動を求められます。サーバが再起動すると、リストアされたファイルが元のデータベースにマージされます。対応するアプリケーションが実行中でない場合、元の場所へのリストアプロセスの際に一時ファイルは作成されないため、サーバを再起動する必要はありません。

Arcserve Replication リストアは、Windows Systems Client Agent でのみサポートされています。そのため、別のリストア場所は Windows Systems Client Agent ツリー内にあるディスティネーション マシンまたはボリュームである必要があります。Client Agent ツリーの下にないサーバツリーまたは他のツリーにリストアしようとする、リストアジョ

ブは失敗します。必要に応じて、新しいクライアント エージェント マシンを追加できます。新しいクライアント オブジェクトを追加する手順については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

重要: クラスタ環境にインストールされている SQL Server は、再起動できないので、元の場所へリストアを実行する前にアプリケーション リソースを停止する必要があります。

4. セッション単位方式と同様の手順でリストアを続けます。

照会単位でリストア

照会単位方式では、ファイルまたはディレクトリの名前を特定するための検索パターンに基づいて、ファイルをリストアします。リストアするファイルまたはディレクトリの名前はわかっているが、バックアップ元のマシンまたはバックアップ先のメディアがわからない場合は、この方法を使用します。このビューでは Arcserve Backup データベースを使用します。

注：照会単位方式では、File Server シナリオのみサポートされます。

1 つのバックアップジョブを照会単位でリストアする方法

1. Arcserve Backup からリストア マネージャにアクセスして、[ソース]タブを選択し、[ソースビュー]ドロップダウンメニューから 照会単位]を選択します。

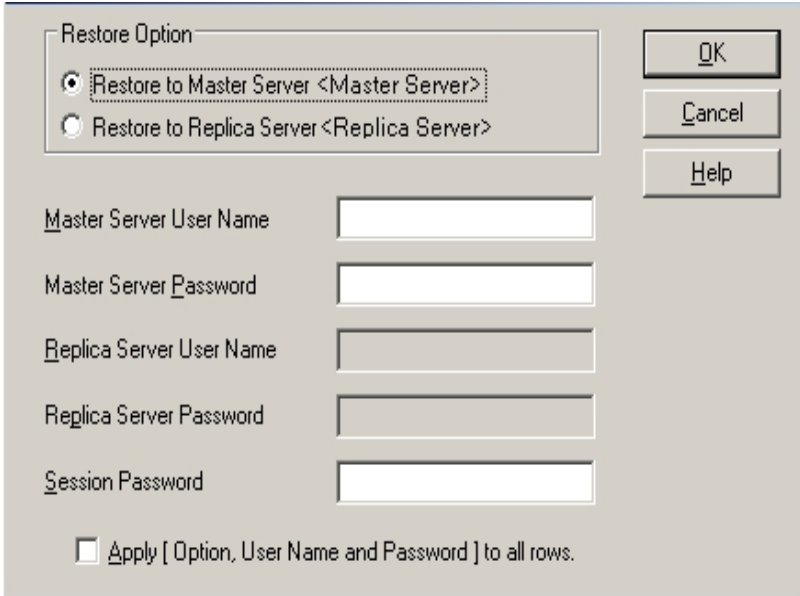
リストア マネージャの上のペインにフィールドが表示され、バックアップ済みでリストア可能なシナリオの検索条件を入力できます。

2. 検索条件を指定して、[照会]をクリックします。

リストア マネージャの下側のペインに、照会条件に一致する項目がすべて表示されます。

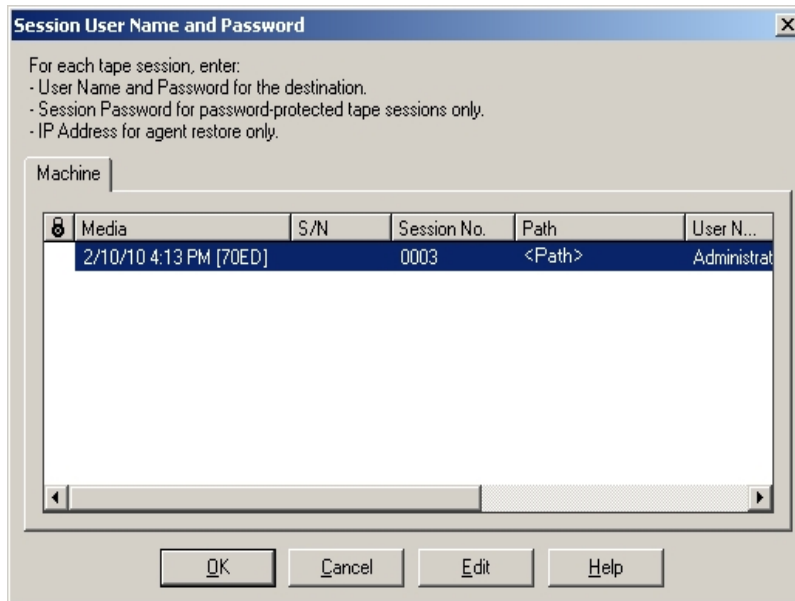
3. リストアするファイルまたはディレクトリを選択し、[サブミット]ボタンをクリックしてジョブを実行します。

選択したファイルまたはディレクトリが Arcserve Replication シナリオの場合、[Arcserve Replication セッション用 ユーザ名 およびパスワードの入力]ダイアログボックスが表示されます。



The image shows a 'Restore Option' dialog box. It has two radio buttons: 'Restore to Master Server <Master Server>' (selected) and 'Restore to Replica Server <Replica Server>'. To the right are 'OK', 'Cancel', and 'Help' buttons. Below the radio buttons are five text input fields: 'Master Server User Name', 'Master Server Password', 'Replica Server User Name', 'Replica Server Password', and 'Session Password'. At the bottom is a checkbox labeled 'Apply [Option, User Name and Password] to all rows.'

選択したファイルまたはディレクトリが Arcserve Replication シナリオでない場合、
[セッション ユーザ名 およびパスワード] ダイアログ ボックスが表示されます。



4. セッション単位方式と同様の手順でリストアを続けます。

MS Exchange シナリオのマスタ マシンへのリストア

MS Exchange シナリオからバックアップ データをマスタ サーバにリストアする場合、メールボックス ストアは、自動的にリストア前にマウント解除されたり、リストアジョブが終了した後でマウントされたりはしません。Exchange メールボックス データベースをマスタ サーバにリストアするには、以下の作業を実行する必要があります。

MS Exchange シナリオのマスタ サーバへのリストア

1. Exchange 管理コンソールから、リストアするメールボックス データベースの各 データベースを個々にマウント解除します。
メールボックス データベースのデータベースがすべてマウント解除されます。
2. Microsoft Exchange Server のメールボックスのフォルダにアクセスし、そのフォルダからすべてのメールボックス データベースのファイルを削除します。
すべてのメールボックス データベース ファイルが削除されます。
注：サーバ上の空きディスク容量が十分な場合は、中身を削除することなくフォルダの名前を変更し、リストアジョブが正常に終了した後で削除することもできます。
3. マスタ サーバへのリストアを実行します([セッション単位]、[ツリー単位]、または [照会単位] 方式を使用します)。
4. リストアが正常に終了したら、Exchange 管理コンソールに戻り、リストアしたばかりのメールボックス データベースの各 データベースをマウントします。

マスタ マシンへの Microsoft SQL Server データベースのリストア

Arcserve Backup を使用してマスタ サーバに SQL データベースをリストアする場合、SQL Server 2008 を実行していると、Windows で SQL Server を開始できないことを示すエラー メッセージが表示される場合があります。このエラーは、マスタ上の SQL ログ ファイルに対するアクセス権を持たないネットワーク サービスまたはローカル サービス アカウントによって発生します。

このエラーを回避するには、以下の 3 とおりの方法があります。

- Arcserve RHA で、[ACL のレプリケート] オプションを [オン] に設定します。これにより、マスタ SQL データ ディレクトリのすべての ACL 情報がリカバリ後に保持されるため、SQL サービスが機能するようになります。
- Arcserve Backup で、リカバリ後に手動で次のユーザ アカウントをマスタ上の SQL データ ディレクトリの ACL に追加します：SQLServerMSSQLUser\$ComputerName\$Instance Name
- Arcserve Backup で、次のリストア オプションを無効にし、リストア後にマスタ上の SQL データ フォルダの ACL が上書きされないようにします：[Arcserve Backup マネージャ]- [グローバルオプション]- [操作]。[ファイルの属性とセキュリティ情報をリストア] オプションをオンまたはオフにします。このオプションをオンにすると、ACL が上書きされます。オプションをオフにすると、ACL が上書きされません。

第5章: バックアップ ジョブとレプリケーション ジョブのモニタリング

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

統合されたジョブ モニタリング	68
を使用したジョブ ステータスのモニタリングArcserve Backup	69
を使用したジョブ ステータスのモニタリングArcserve Replication	72
アラート通知	75
レポートの生成	78

統合されたジョブ モニタリング

バックアップ ジョブとレプリケーション ジョブのステータスのモニタリングは、リアルタイム イベント モニタリング、生成されたアラート、およびさまざまなレポートの組み合わせから構成されます。Arcserve Backup および Arcserve Replication を利用して、統合化されたバックアップ プロセス全体をモニタリングできます。

を使用したジョブ ステータスのモニタリングArcserve Backup

バックアップ プロセスのモニタリングの手順は、統合された環境でも変わりません。バックアップ プロセスのモニタリングの詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

統合化されたバックアップ プロセスのモニタリングは、Arcserve Backup のジョブ ステータス マネージャを使用して行います。ジョブ ステータス マネージャは、グラフィカルツールで、企業内の Arcserve Backup サーバを一元管理して、保留中、完了、およびアクティブなジョブをすべて [ジョブ ステータス マネージャ] ウィンドウからモニタリングできます。[ジョブ ステータス マネージャ] ウィンドウには、モニタリングするための [ジョブ キュー] タブと [アクティビティ ログ] タブがあります。。

ジョブ キュー モニタリング

右 ペインの [ジョブ キュー] タブには、すべてのジョブの情報が表示されます。Arcserve Backup バックアップ マネージャでジョブを実行またはスケジュールするたびに、ジョブ キューにジョブをサブミットします。Arcserve Backup は、ジョブ キューを常時スキャンし、実行待ちのジョブを検索します。

Arcserve Backup キュー内にジョブがあると、ステータスも一緒に表示されます。表示されるステータスは、以下のいずれかです。

処理済み

実行済みのジョブ(繰り返し間隔の指定なし)。

レディ

実行待ち状態にある、新規の1回限りのジョブまたは繰り返しジョブ。たとえば、毎週金曜日に実行されるジョブなどです。

アクティブ

現在実行中のジョブ。

ホールド

キュー内で実行待ちのジョブ。

統合されたバックアップ ジョブがサブミットされると、[ジョブ キュー] ウィンドウにシナリオ名が表示され、ジョブの進行状況をモニタリングできます。

アクティビティ ログのモニタリング

右 ペインの「アクティビティ ログ」タブには、Arcserve Backup によって実行されたすべての処理情報が一般的に記録されます。アクティビティ ログは、実行されたすべてのジョブの監査記録になります。このログには、それぞれのジョブについて、以下の情報が含まれます。

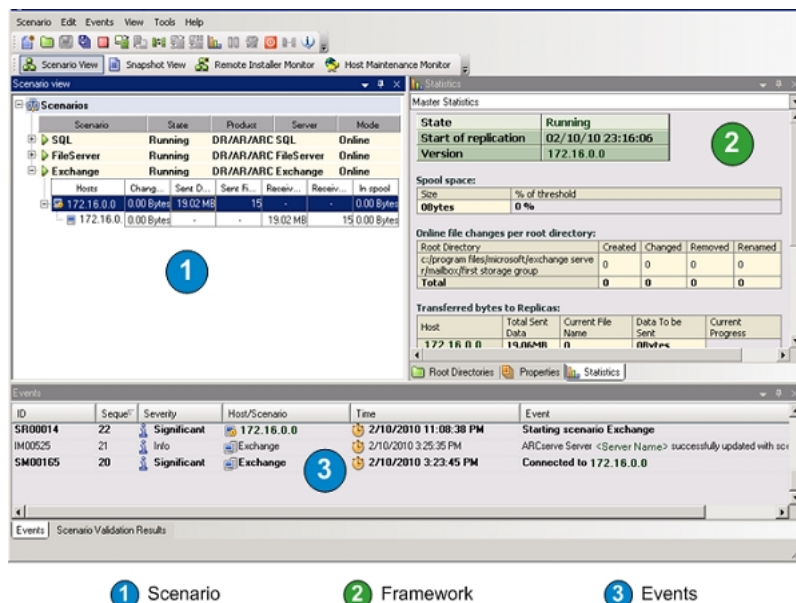
- ジョブの開始日時と終了日時
- ジョブの種類
- データの平均スループット
- 処理された(つまりバックアップ、リストア、またはコピーされた) ディレクトリとファイルの総数
- ジョブのセッション番号とジョブ ID
- ジョブの結果
- ジョブの実行中に発生したエラーと警告

統合されたバックアップジョブがサブミットされると、「アクティビティ ログ」ウィンドウにシナリオ名が表示され、ジョブの進行状況をモニタリングできます。

を使用したジョブ ステータスのモニタリング Arcserve Replication

レプリケーション プロセスのモニタリングの手順は、統合された環境でも変わりません。レプリケーション プロセスのモニタリングの詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

シナリオの実行後は、Arcserve Replication マネージャからレプリケーション プロセスをモニタリングできます。モニタリングによって、ステータス情報、統計、およびイベントが表示できます。Arcserve Replication マネージャのメイン ウィンドウは、シナリオ、フレームワーク、イベントという 3 つの従属ペインで構成されます。



シナリオ ペインには、各 ホストが、レプリケーション プロセスの現在のステータスと共に表示されます。レプリケーションのステータスは、シナリオ名の左に表示される以下のアイコンのいずれかで判断できます。



シナリオのレプリケーション プロセスが正常に実行中です。



シナリオは作成されましたが、レプリケーション プロセスが停止または中断されています。



問題]

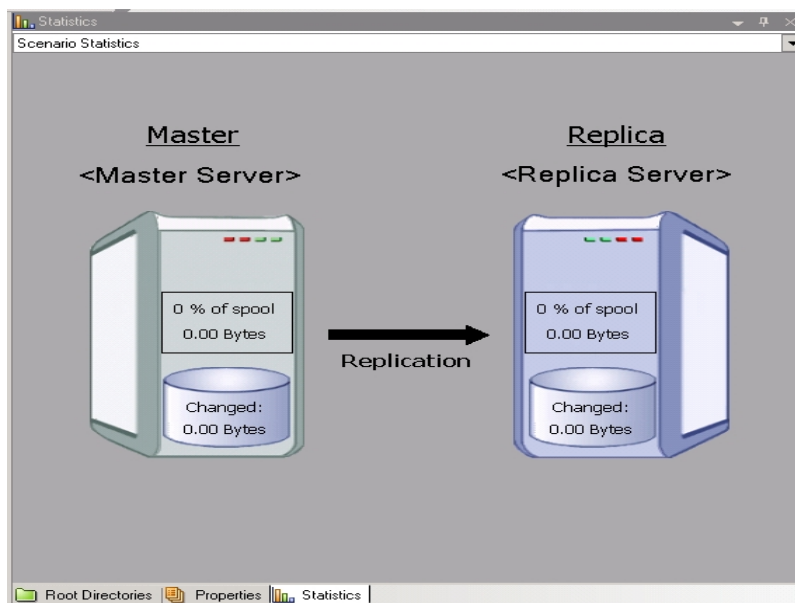
シナリオに問題があります。シナリオ名をクリックして、関連するエラーメッセージを [イベント] ウィンドウに表示できます。

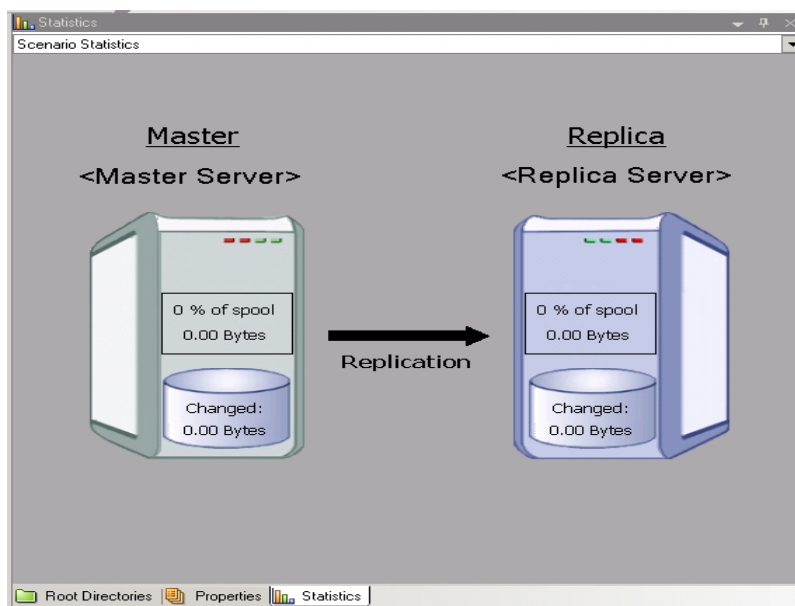


未認可]

マスタ サーバに対するユーザ名またはパスワードが不正か不明です。

フレームワーク ペインには、ディレクトリ、サブディレクトリ、およびそれらに含まれるファイルが表示されます。フレームワーク ペインには、ジョブのステータスに応じて、[統計情報]、[ディレクトリ]、および [プロパティ] の各タブ、またはそのうちの2つが表示されます。[統計情報] タブはレプリケーション プロセスの実行中にのみ使用でき、ルート ディレクトリごとのデータ量、レプリカごとの記録されたデータ、および同期化情報が表示されます。ドロップダウン メニューから [シナリオの統計情報] (グラフィックによるシナリオステータス概要)、[マスタ統計情報] (表形式のマスタサーバステータス概要)、[レプリカ統計情報] (表形式のレプリカサーバステータス概要) の表示を選択可能です。





イベント ペインには、メッセージと一般的な情報 (たとえば、ディレクトリが同期化された、サーバが接続された、同期化が開始/終了した、など) が表示されます。この情報は、実行中のレプリケーション シナリオに含まれているサーバから取得されます。イベント ペインの情報には、サーバ名、時刻、イベントの簡単な説明が含まれます。重要な情報やエラー メッセージは太字で表示されます。さらにイベント ペインには、以下の画面のように Arcserve Replication 経由で開始されたバックアップジョブの Arcserve Backup ステータスも表示されます。

Scenarios					
Scenario	State	Product	Server	Mode	
SQL	Running	DR/AR/A...	SQL	Online	
Hosts	Chang...	Sent F...	Receiv...	In spoc	
<Host Name>	0.00 Bytes	64.38 MB	14	-	0.00 By
<Host Na	0.00 Bytes	-	64.38 MB	14	0.00 By
FileServer	Running	DR/AR/A...	FileServer	Online	
Hosts	Chang...	Sent F...	Receiv...	In spoc	
<Host Name>	0.00 Bytes	0.00 Bytes	0	-	0.00 By
<Host Na	0.00 Bytes	-	0.00 Bytes	0	0.00 By

ID	Sequence	Severity	Host/Scenario	Time	Event
SR00104	95	Significant	<Host Name>	2/10/2010 4:59:37 PM	Replication to replica <Server Name> resumed
IM00405	94	Info	FileServer	2/10/2010 4:59:36 PM	Posting Assured Recovery report created at '2/10/2010 16:59:36' to Reports
SR00392	92	Significant	<Host Name>	2/10/2010 4:59:36 PM	FileServer Integrity Testing on replica <Server Name> is finished
IR00199	91	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:59:36 PM	Shadow Copy Id for volume C:\ is (4b18ed4-bd00-46d3-84bd-61a29f93993)
IR00197	90	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:59:36 PM	Shadow Copy is built successfully
IR00175	89	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:59:30 PM	Building Shadow Copy
IR00343	88	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:59:30 PM	Replica <Server Name> suspended for Integrity testing
IM00405	74	Info	FileServer	2/10/2010 4:21:24 PM	Posting Assured Recovery report created at '2/10/2010 16:21:24' to Reports
SR00104	72	Significant	<Host Name>	2/10/2010 4:21:25 PM	Replication to replica <Server Name> resumed
SR00392	71	Significant	<Host Name>	2/10/2010 4:21:24 PM	FileServer Integrity Testing on replica <Server Name> is finished
IR00199	70	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:21:24 PM	Shadow Copy Id for volume C:\ is (4a77659f-25ff-4a83-bd3d-d93cd28472e)
IR00197	69	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:21:24 PM	Shadow Copy is built successfully
IR00175	68	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:21:15 PM	Building Shadow Copy
IR00343	67	Info	<Host Name>	2/10/2010 4:21:15 PM	Replica <Server Name> suspended for Integrity testing
SR00104	53	Significant	<Host Name>	2/10/2010 4:14:47 PM	Replication to replica <Server Name> resumed
IM00405	52	Info	FileServer	2/10/2010 4:14:46 PM	Posting Assured Recovery report created at '2/10/2010 16:14:47' to Reports
SR00392	50	Significant	<Host Name>	2/10/2010 4:14:46 PM	FileServer Integrity Testing on replica <Server Name> is finished

アラート通知

アラートの生成および受信手順は、統合された環境でも変わりません。

- バックアッププロセス中のアラート生成の詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。
- レプリケーションプロセス中のアラート生成の詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

Arcserve Backup アラート

Alert 通知システムを使用すると、バックアップ処理中にアクティビティログに表示されるイベントに関するメッセージを通知できます。また、これらのアラート通知の受信方式も指定できます。通知されるイベントを以下の中から1つ以上選択できます。

「ジョブが完了した時」

すべてのノード、ドライブ、共有リソースが処理されました。

「ジョブが未完了の時」

一部のノード、ドライブ、共有リソース、またはファイルが不明です。

「ジョブがキャンセルされた時」

ユーザがジョブをキャンセルしました。

「ジョブが失敗した時」

ジョブを開始したが未完了です。

「ウイルスが検出された時」

バックアップ対象のファイルの1つでウイルスが検出されました。

「カスタマイズされたイベント」

カスタマイズされたイベントが発生しました。このイベントを指定するには、「イベント」ドロップダウンリストの下部にあるフィールドに、エラー、警告、または通知コードを入力します。

Arcserve Replication アラート

すべてのイベントはリアルタイムで Arcserve Replication マネージャにレポートされ、OS のイベント ログシステムに統合されます。アラートは設定されたアドレスに電子メールで自動的に送信できます。また、通知スクリプトを有効にすることもできます。同期化とレプリケーションの間には、詳細なリアルタイム統計情報が提供されます。シナリオに対してイベント通知が設定されると、以下の条件で通知がトリガされます。

接続の切断

TCP 接続を使用できない、またはネットワークあるいはサーバがダウンしています。

キューのオーバーフロー

キュー スプール ディレクトリ内のデータ量が、そのしきい値を超えています。

その他

その他のエラー

重要な情報

同期化の完了時刻などの重要な情報です。

レポートの生成

レポートの生成手順は、統合された環境でも変わりません。

- バックアッププロセス中のレポートの詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。
- レプリケーションプロセス中のレポートの詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

Arcserve Backup レポート

Arcserve Backup レポート マネージャおよび Arcserve Replication で生成されたレポートは、互いに補完し合い、Arcserve Backup データベースに格納されたアクティビティを基にさまざまなレポートを提供します。レポートをプレビューしたり、プリンタまたはファイルに出力したり、レポートの作成をスケジューリングしたりすることができます。Arcserve Backup にはいくつかの標準レポートがあり、一般的なバックアップおよびリストアアクティビティが表示されます。また、特定のニーズに合わせたカスタムレポートも作成できます。レポート フィルタを使用して、レポートに含めるバックアップメディアを選択できます。

たとえば、失敗したバックアップジョブのレポートを自動的に作成して電子メールで送信するように Arcserve Backup を設定する、またはアシュアード リカバリ(回復検証)で開始されたターゲット バックアップジョブのためのカスタマイズレポートを作成することができます。

注：バックアップまたはリストアプロセス中のレポートの詳細については、「[Arcserve Backup 管理者ガイド](#)」を参照してください。

Arcserve Replication レポート

Arcserve Replication では、レプリケーション プロセスおよび同期 プロセス時にレポートを生成できます。これらのレポートはマスタに格納、Arcserve Replication マネージャで表示するために送信、または指定したアドレスへ電子メールで送信できます。また、スクリプトの実行もトリガできます。

Arcserve Replication の生成レポートには以下のものがあります。

シナリオレポート

シナリオレポートには、同期化タスクからの統計情報(レプリケートされた変更データの量など)が含まれます。このレポートは、各同期化プロセスの最後に表示されるように設定できます。

このレポートは、すべてのプロセスが正常に実行されていること、および継続的に変更されているデータ量を確認するのに役立ちます。

相違点レポート

相違点レポートでは、マスタサーバとレプリカサーバ間の相違が比較され、レプリケーションプロセスの最後に各レプリカに対して生成されます。レプリケーションが中断された場合、すべての変更はレプリケーションが再開されるまでマスタサーバにスプールされます。この中断の間、相違点レポートには変更されたデータ量が表示されます。相違点レポートはいつでも作成できます。

このレポートは、特定のイベントで変更されたデータ量を判断するのに役立ちます。

レプリケーションレポート

レプリケーションレポートには、レプリケーションプロセスが開始してからレプリケートされたデータの統計情報、および前回のレポート以降にレプリケートされたデータの統計情報が含まれます。データには、レプリケートされたバイト数、作成/更新/削除/および名前変更されたファイル数、およびエラーの数が含まれます。サマリレポートまたは詳細レポートのいずれかを表示できます。

このレポートは、環境内でどの程度のデータが変更されているか、大まかに把握するのに役立ちます。

同期化レポート

同期化が終わると、Arcserve Replication によって、転送されたファイルの一覧を表示するレポートが作成されて開かれます。このレポートには、削除あるいは変更されたファイルの総数、転送されたバイト数が含まれ、すべての関連ファイル名、ファイルパス、およびサイズが一覧表示されます。

このレポートは、環境内でのデータ変更とデータの増加をモニタリングおよび管理するのに役立ちます。

注: レプリケーション プロセス中のレポートの詳細については、「[Arcserve RHA 管理者ガイド](#)」を参照してください。

第6章: トラブルシューティング

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

統合されたトラブルシューティング	84
エラー/警告メッセージ	85

統合されたトラブルシューティング

問題が検出されると、問題の確認、トラブルシューティングや解決に役立つメッセージが、Arcserve Backup によって生成されます。これらのメッセージはアクティビティログに含まれており、[ジョブステータス]-[アクティビティログ]タブから確認できます。アクティビティログでエラーまたは警告メッセージをダブルクリックすると、メッセージの詳細が表示されます。

エラー/警告メッセージ

生成されたメッセージは、問題によって発生する結果の重要度に基づいて、エラーメッセージと警告メッセージに分類されます。エラーメッセージは、より重大で、通常はジョブを続行する前に修正される必要がある機能的な問題を示します。警告メッセージは重要度が低く、注意する必要がある問題を示します。ただし、ジョブの続行は可能です。

生成されるメッセージは、以下の情報の一部またはすべてでフォーマットされます。

メッセージ

警告またはエラーの ID 番号 (警告の場合は W、エラーの場合は E のプレフィックスが付きます)、対応するエラーコード、または Arcserve Backup により生成される簡単な説明を示します。エージェントのメッセージ番号は、AW (エージェント警告) または AE (エージェント エラー) のいずれかのプレフィックスが付きます。

モジュール

メッセージが生成されたシステムコンポーネントまたは領域を示します。

原因

メッセージの生成を引き起こしたと考えられる原因を示します。

アクション

実行できる問題解決策や手順を示します。

第7章: 用語集

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

アシュアード リカバリ	87
継続的なデータ保護	87
データのリワインド	87
フェールオーバー	87
マスタ サーバ	87
レプリカ サーバ	88
同期	88

アシュアード リカバリ

アシュアード リカバリ(回復検証)では、実稼働環境やレプリケートしたデータに影響を与えることなく、実際にアプリケーションを実行することで(データの変更も含む)、惨事復旧サーバを正確にテストできます。

継続的なデータ保護

CDP(継続的なデータ保護)は、データをリカバリするための機能です。これは、たとえば、日次または週次のバックアップまたはスナップショットでキャプチャされたある特定の以前の状態にリカバリするだけでなく、任意の時点の状態にデータをリカバリできる機能です。

データのリワインド

データのリワインドは、ファイルを破損前の時点(リワインドポイント)までリワインドするリカバリ方式です。

フェールオーバー

フェールオーバーは、マスタサーバ上で保護されているアプリケーションの障害を検出し、基本的にはデータも時間もまったく無駄にせずに指定されたレプリカサーバに(自動的にまたは手動で)切り替える機能です。

マスタ サーバ

マスタサーバは、ユーザが実際にデータの変更(読み込みおよび書き込み)を行うアクティブサーバまたは実稼働サーバです。

レプリカサーバ

レプリカサーバはパッシブサーバです。マスタサーバからレプリケートされた変更を除き、このサーバではデータを変更することができません(読み取り専用)。

同期

同期化は、マスタサーバのデータをレプリカサーバのデータと同期させるプロセスです。